

「王朝交代論」が開く視界

「蝶の雑記帳 100」

王都太宰府の歴史

日本列島の古代について二冊の書物を出版した。相応の力を尽くしたつもりだったが、あとになっていろいろ考えているともっと関連する事項があったことに気づく。とくに二冊目は、体調が悪いなかで準備していた内容をなんとか形にしておきたいと考え、十分回復する前にまとめたせいで言い足りない点が多い。考察を深めれば、二冊の書物に著した「倭国日本国交代論」に追加すべき論点が出てくる。今はさらに関連する材料を見つけ出して思索する段階にあると思うけれども、老いた蝶の先は見えてきたから、重要だと考えられる論点についてある程度まとまりのあるノートができたならそのつど記録していくことにする。

というわけで、初回は、太宰府の歴史を探求して、そこが王都だったという結論を得たことを記す。

まえがき

『日本書紀』はアマゾンのジャングルのような書物である。その密林に入ってどれほどの人が道に迷ったことだろう、とわたしは思う。日本古代史の現行パラダイムは、「奈良盆地の王権が古くからずっと日本列島西部を支配した」という『記・紀』の主張を基本的な前提とする。その枠組みは、上

空や境界の外から密林全体を眺望して特徴をつかむ手間を省き、ただ木々の中を進むように誘導する。けれども、そのやり方では、探求が行きづまったときに大局的に検討しなおすことができない。錯綜した探求路だけが残ることになり、筋道だった共通理解はなかなか得られない。こういう比喻も現行パラダイムを信奉する人には通じないのだろうか。

客観的に見れば、歴代の中国史書は、「奈良盆地の王権が古くからずっと列島西部を支配した」という基本前提と矛盾すると考えられる記述を含んでいる。その矛盾を無視して進めば密林の岐路で一方向にしか進めず、迷路に入りこむことになるのである。歴史の研究では、前提なしに考察して得られた合理的な理解のうち、最も整合的で蓋然性の高い体系が共通理解になりえるのである。わたしの二つの著作は、そういう考え方から、密林を眺望する視点を導入した上でジャンルに分け入り、まずは大まかな区分けをする道標を立てようとした探求である。道標のあいだに事態に適合する筋の通った道をつけるのは次の段階の仕事だ、と考えている。

区分けの道標を立てる仕事はまだ残っている。その最初の作業となるこのノートは、歴史の画期を体現して外形的に現われた歴史事実を材料として、その背後にある歴史の推移を合理的に説明できるものかどうか調査・検討し、その結果を報告する。第1節は、すでに著書で示したものだが、探求の開始点を確認するためにある。

第1節 「太陽の道」の神殿と王都の地理的關係

最初に『倭国はここにあった』で概念化した「太陽の道」について、格式高い神殿で象徴化された「太陽の道」の完成形を確認しておこう。それは地図化されていて、まえがきで用いた道標という比喩に適合し、第2節以降での議論の仕方の見本ともなるだろう。

「太陽の道」という概念は、「玄海灘とそれをとりまく沿岸域、とくに福岡都市圏」で形づくられた。それを一つにまとめて図示したのが図 1.1 である。この図は、① 宝満山 A と飯盛山 B を結ぶ東西線上に三つの弥生遺跡 (a, b, c) が直列し、弥生時代の倭の中心王国がこの「太陽の道」を崇拝する地域に形成された、② 古墳時代以降には、二つの神殿「宇佐宮と宗像大社」が指し示す焦点太宰府が王都だった、という極めて蓋然性の高い結論に導く。それらの焦点は、『後漢書』

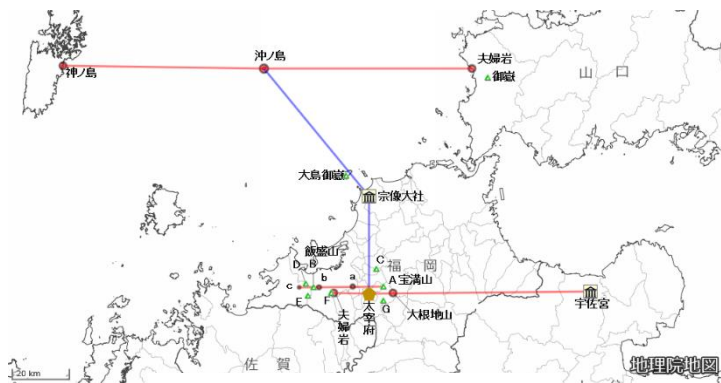


図 1.1 「太陽の道」の祖型と発展形

から『隋書』までの中国史書が記述する倭国の中心部に位置する。図 1.1 が示す「太陽の道」はたしかに 600 年代前半まで崇拜されて存在した、ということである。

のちの日本国は、その宗教制度の頂点に伊勢の皇大神宮を置いたが、その皇大神宮と王都新益京(藤原京)とを地図上に表わせれば、図 1.2 のようになる。皇大神宮建立の時期は鎌倉時代成立と考えられる後世の文書に書かれた説話に基づいて語られるが、それは信頼できない。『日本書紀』に基づけば、〈大和〉の王家が齋宮をおく神殿を建てて「太陽の道」を設定したのは、天武王のときに始まる。それは、図 1.2 が示す伊勢齋宮と三輪山とを結ぶ東西線だった、と考えられる。だが、それは王たちの宮の置かれた奈良盆地南東部から外れていたせい、のちに、緯度が少し南の場所に新たに皇大神宮が建造された。しかし、〈大和〉で初めての条坊に区画され

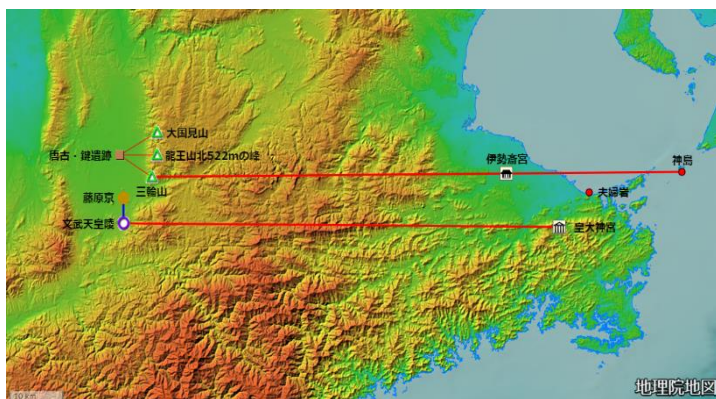


図 1.2 〈大和〉の王家の制定した「太陽の道」

た王都藤原京は、皇大神宮が指し示すはずの「太陽の道」東西線上には建設できなかった。そこで、あとづけになるけれども、文武天皇の陵墓が、皇大神宮の真西で藤原京の真南となる場所に築かれた、と考えられる。文武天皇陵が結節点になって藤原京が皇大神宮につながれたことは、〈大和〉の王家の「太陽の道」が確定したのは、藤原京で文武天皇が即位し元号を建てて亡くなるまでの時期、と推定させる。

時代の異なる図 1.1 と図 1.2 を比較すれば、〈大和〉の王家の「太陽の道」は、福岡都市圏・太宰府で制定された「太陽の道」をお手本に制定されたことが判る。論証の詳細は著書にゆずるが、「太陽の道」という概念は、文武天皇の日本国が先行する倭国から移行した国であることを教えるのである。そういうわけで、図 1.1 は探求路の出発地を示す道標であり、図 1.2 は、700 年ころの文武天皇の時期が歴史の画期であることを示して、探求路の終着地を表わす標識である、とすることができる。

第2節 条坊に区画された王都のプラン

それでは、倭国日本国交代の終局をさらにくわしく知るために、文武天皇がそこで亡くなった藤原京のことを調査し検討してみよう。藤原京は、奈良盆地で初めて建設された条坊で区画された王都である。図 2.1 が、発掘調査によって推定された藤原京条坊の中央部である（林部均「藤原京の条坊施工

年代再論」、「国立歴史民俗博物館研究報告」160集 p4, 2010年)。

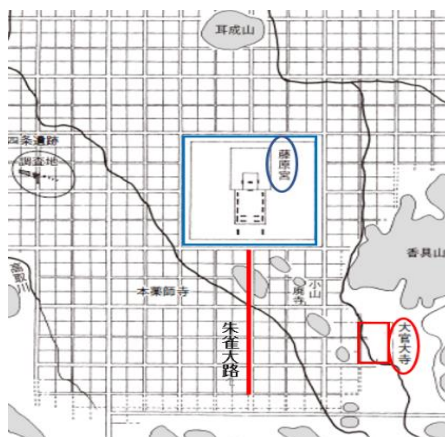


図 2.1 藤原京の条坊 (引用)

条坊で区画された王都プランの特徴は、重要な建築物がどのように配置されたかに現われる。だから、藤原京の建設プランの特徴は、ほかの王都と比較したときに明らかになる。藤原京は持統王が 694 年に宮を遷したところで、文武王が即位したのもそこだから、まず、当時の東アジアで王都のモデルだった唐の長安城とくらべるのが順当だろう。図 2.2 がその長安城の都城プランを示す復元図である (布野修司「大興城(隋唐長安)の設計図」、京都大学「新建築学研究」16 p60, 2015 年)。

図 2.1 と図 2.2 を比較すれば、藤原京の王宮は王都のほぼ中央にあって、長安城の王宮が北の端にあるのと異なることが分かる。この点が、藤原京のプランが『周礼』のようなずっと古い典拠に依っているという推測の根拠である。しかし、



図 2.2 唐の長安城(引用)

藤原京では中国の王都を特徴づける他の重要な施設がどこにあったかそれほど知られていない。一つ気づく相違は、藤原京では寺院の筆頭である大官大寺が王宮の南東にあるが、唐の長安城(隋の大興城)では鎮護国家の寺院大興善寺が王城(内城)の真南を貫く朱雀大街に面する位置にあることである。けれども、仏教は後漢の時代に伝来したのだから、都城での寺院の配置は古い典拠に書かれてはいない。藤原京の大官大寺の配置は何か別の考え方に由来すると考えられる。

「大官大寺」という語句は「天武紀下」から現われるが、藤原京の大官大寺は、王宮ができた694年よりもあと697年に即位した文武王の代に造営が始まり、平城京への遷都後まだ完成途上の711年に焼失したという。このことは、藤原京の建設には長い年月がかかり、平城京への遷都後にも条坊や建物の整備・建造が継続されていたことを物語る。これは、あとの考察でも参照すべきだろう。

それでは、藤原京を、図1.1の「太陽の道」が藤原京よりも以前からあったと告げる古都太宰府と比較して見よう。名残の地名が証言していたのだが、太宰府も条坊に区画された



図2.3 太宰府の条坊(引用)

都市であったことが発掘調査によって確認された。1968年
以来の発掘調査を整理総合した太宰府条坊復元図を図 2.3 に
示そう（井上信正「大宰府条坊区画の成立」、「考古学ジャーナル」
No988 p19, 2009年。この条坊復元図は西日本新聞のホームページ
<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/413395/>で見ることができ
る）。ここでも、この推定復元図が長い年月にわたる建設を
集成したものであることに留意する必要がある。

図 2.3 を図 2.1・図 2.2 と比較すると、太宰府政庁は条坊の
北にあって、太宰府の王都プランが唐の長安城(隋の大興城)と
相似で、藤原京と異なることが分かる。もう一つの相違は、
藤原京では最も格の高い大官大寺が王宮の南東に位置する
のに対し、太宰府条坊で重要な寺院と考えられる観世音寺が
政庁の東方に位置する点である。太宰府での観世音寺の配置
は、唐の長安城の大興善寺の配置とも異なる。図 2.3 には条坊
中央部の東にもう一つ般若寺という寺があったことが示されてい
る。この寺を、『上宮聖徳法王帝説』の記す「筑紫大宰帥蘇我日向
が 654 年に孝徳王の病氣平癒を祈願して建てた寺」とする説がある
らしい。しかし、二つの書物で論じたように、観世音寺が太宰府に
とって最重要な寺だと考えるので、ここではとりあげない。

王宮・政庁と大きな寺院が王都のどこに配置されたかとい
う問題をもう少し考えるために、さらに、朝鮮半島の百済の
王都泗泚および新羅の王都金城と比較してみよう。

インターネットで漢字をキーワードに検索しても、韓国の

文献に出ている王都プランを見つけることはできなかった。昔の百済の王都泗泚は現代の扶余市である。その案内図のなかにあった図 2.4 を用いて考えよう。この図はかつての泗泚の王都プランを大まかに教えてくれる。王宮から南へまっすぐ朱雀大路が伸びていて、それに直交して王宮南側におおよそ東西に走る大路を認めることができる。王宮は北を扶蘇山城で守られて、長安城と同じく都市の北端にある。長安との違いは、錦江が扶蘇山城の北から泗泚の西側さらに南側を囲むように流れて防衛していることである。だから、ここでは王都を取り巻く城壁は築かれなかった（泗泚が陥落したとき女官たちが扶蘇山城の崖から錦江に身を投げたという伝承がある）。

朱雀大路が王都の中央部に近づくあたりに定林寺址と書かれているが、ここは 660 年唐軍が泗泚を陥落させたときに焼かれた定林寺があった場所である。国家的な寺院定林寺は



図 2.4 百済の王都泗泚

都市中央部に朱雀大路に接して東側に立てられていたのである。百済が538年に遷都した泗泚は、王宮と国家的寺院の配置に関して唐の長安城と相似なプランで築かれたことが確認できた。

新羅の都金城はおおよそ山に囲まれた盆地(現代の慶州市)で、長い年月をかけて発展したようだ(朴方龍「新羅王京の都市計画成立と発展」と王仲殊「唐長安城および洛陽城と東アジアの都城」、「東アジアの都市形態と文明史」21巻 p65 と p411, 2004

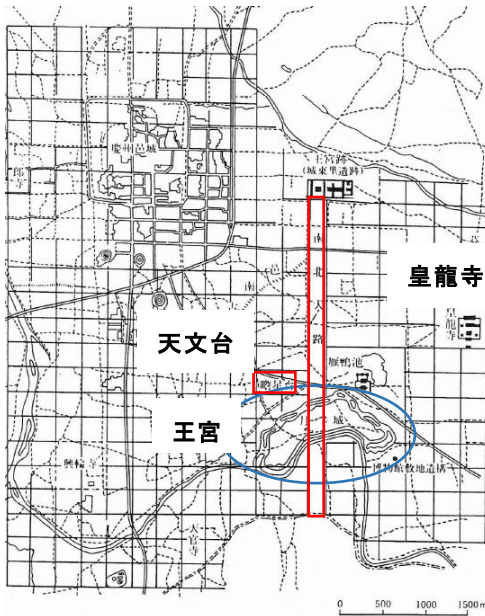


図 2.5 新羅の王都金城(引用)

年)。図 2.5 に見られるように、楕円で囲んだ丘陵「月城」に王宮が置かれた（図 2.5 は、王仲殊の論文に掲載された「尹武炳による慶州の王京プランの復原」を孫引きしたものである）。文献では 400 年代後半から坊里をもつ王都が整備されていったとされる。南北・東西の道によって区画することが行なわれたが、その地形から月城にある王宮を動かせず、中国の都城プランに倣って建物を配置することはできなかった、と見える。それでも、王都を南北に貫く南北大路があった。そして中国の王都のように、図の四角で囲ったところに天文台（瞻星台 640 年代）があった。553 年創建という皇龍寺は新羅最大の寺院として後世まで存続したというが、プランがあって王都の東の端に配置されたとは考えにくい。藤原京の大官大寺の配置が皇龍寺の配置と関連があるとは言えないだろう。

百済の王都泗泚と新羅の王都金城は、平原にはなくて王都をとり囲む城壁を築く代わりに山城を築いて防衛した。この点は太宰府にも共通する。それを考えると、飛鳥浄御原宮まで〈大和〉の王の宮は奈良盆地南東の山に囲まれた狭い場所にあったのを、北のもう少し開けたところに出て藤原京を建設するとき、防衛の観点を取り入れるとしたら、王都の北端に王宮を置くのはためらわれた可能性がある。藤原京で王宮が中央に配置されたのは、古い『周礼』のせいばかりではないかもしれない。

第3節 中国の都城プランの変遷

ここまで藤原京と太宰府を時代の状況に照らして理解しようと、同時代の中国・朝鮮半島の王都と比較してみたが、まだ踏みこんだ理解ではない。ひとまず、影響を与えたはずの中国の王都プランの変遷をもう少し探してみよう。

前著『日本国はどのようにして成立したか』で、中国史書のなかに王朝交代規範を探したとき、「新」を建てた王莽がさかんに古典を根拠に制度を変更していく過程を知ったが、そこには王都プランに関係することも書かれていた（明堂・辟雍・靈台を起し、上帝を南郊に祀り、春を東郊に迎え、大射礼を明堂に行ない……）。明堂とは古代の帝王が「政・教」を明らかにした建物というが、王莽がやったことはそれを細分化することであった。歴史を経るうちに名が変わったが、天帝を祀る円丘(天壇)が王都の南郊につくられ、靈台(天文台)・辟雍(大学)などの施設も設けられた。

上で触れた語句は日本列島での季節の祭礼に関係していると思われるが、簡潔を期すためにそれは今後の考察にゆずって、倭の五王の時代から王都の建設に影響を与えた可能性のある、中国南北朝の王都について調べてみよう。下倉渉の論文「南北朝の帝都と寺院」（東北学院大学論集「歴史と文化」40号 p197, 2006年）が参考になった。下倉渉の議論を、その論考に示されている図を引用しながら追ってみよう。

442年華北を統一した北魏は、493年、北の長城の近くに

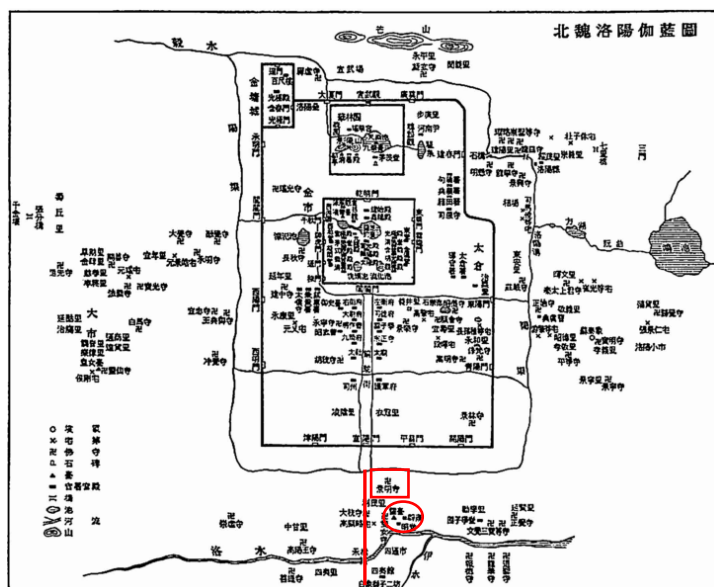


図 3.1 北魏洛陽の宗教的施設の位置(引用)

あった都平城から後漢・魏・晋の都だった洛陽に遷都した。まず北魏洛陽の寺院などを示した地図を、図 3.1 に引用させてもらおう。主に内城(宮城)を示した図であるが、宮城南の正門の外、四角で囲んだところに景明寺という寺院が書かれている。景明寺は官立の大寺であった。すぐ南の楕円で囲んだ場所には、先ほど述べた明堂・辟雍・靈台がある。北方民族の王朝北魏も、宮城南に明堂などの「礼」思想を体現した建物を置いて、古く中原に成立した王朝以来変化しながら伝わってきた帝王の祭祀・礼の伝統を引き継いだのである。さらに、古代からの宗教思想に関する建築のあるその場所

に外来の仏教の寺院も加えられた。旧都平城の近くにあった雲崗石窟が教えるように、北魏でも早くから仏教が信仰されるようになったことが王都のプランに現われた、と言える。

下倉涉の論考によれば、景明寺が建てられたころ、その南方に円丘が造営され宮城の正殿大極殿も築造された。宮城から天を祀る円丘までの北から南への御道の間地点に景明寺を配置する設計思想があった、ということだ。ところが、この布置は、後漢の都洛陽における南宮—明堂—円丘の配列の仕方に対応する、という。この対応を表現する概念図を、

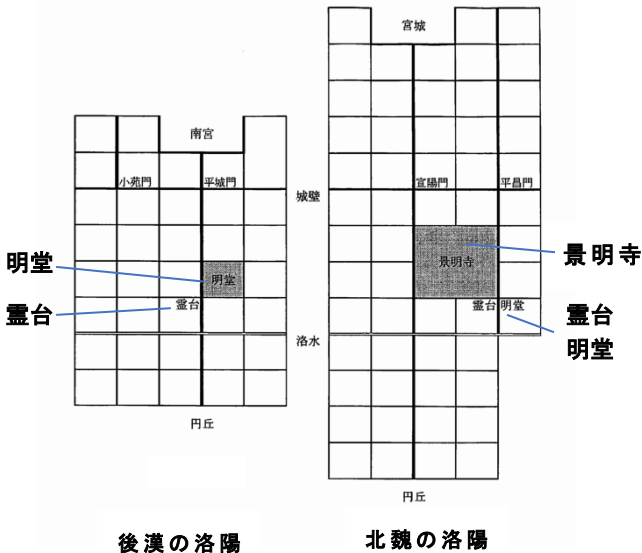


図 3.2 後漢と北魏の王都プラン概念図 (引用)

図 3.2 に引用させてもらおう。北魏では、景明寺が後漢の明堂の代わりになるほど重要視される建築になっていった。

下倉渉は、北魏は、中国古来の「礼」の考えに並ぶものとして外来の仏教を尊重して、王都プランにその思想を表現した、と考える。漢以来儒教が中国の思想を代表するとされたから、下倉は、「礼」の思想を儒家の思想と呼んで、北魏の王都プランにある宗教思想を「儒仏混淆」と表現する。

しかし、『礼記』や『周礼』に表現されている古代の「礼」の思想は、中国の古い思想を総合するもので、儒教だけに引き継がれたのではなくある部分は道教につながる。だから、わたしは、王都プランに汲まれている中心思想を単に儒教ととらえるのではなく、儒教・道教を含む「古教」と呼んで、仏教をも取り入れた宗教的思想を「古教仏教混淆」の思想と考えたい。

それはともかく、北方民族の王朝北魏の流れを汲む北朝の隋・唐の王都大興城＝長安城は、図 3.2 右側の北魏洛陽の王都プランを継承した完成形であると理解できる。ただし、図 2.2 で見たように長安城では、鎮護国家の仏教寺院大興善寺と中国「古教」の施設明堂・霊台を引き継ぐ「道観」とが、朱雀大街を挟んで東西に向き合うように配置された。図 2.2 には描かれていないが、円丘(のちの天壇)は朱雀大街の南に築かれた。今もそこにモニュメントがあり、円丘があったことを教えているらしい。

しかし、北魏が新しい都とした洛陽は、後漢・魏・晋の都であった。北魏の王都プランの中核をなす「礼」の思想は、その洛陽の王都プランから引き継がれたのである。そうすると、北方民族に都の洛陽を蹂躪されて華南に再建された晋（東晋）の王都建康に、洛陽の王都プランが再現されたと考えるのが自然である。だから、王都建康の都城がどのようなものであったかも確認することが必要である。

もう一度下倉渉の議論を拝聴しよう。そこに示してある図を引くのがよいのだけれども、明堂や円丘なども示した図が別の人の論文に見つかったので、そちらを引用させてもらおう（妹尾達彦「江南文化の系譜：建康と洛陽(1)」、*「六朝学術学会報」* 14 p69, 2013年）。図 3.3 がその「南朝建康推測図」である。図のタイトルに「梁を中心として」と添え書きしてあったから、ほぼ南朝梁の時代の都城図なのだろう。

三国時代の諸葛孔明が長江沿いにおいて交通・防衛の要衝で王都に絶好の場所と評した建康（呉の王都建業）は、複雑な地形から華北の都市のように南北・東西方向を軸とする都城を築くには適さなかった。宮城のある内郭だけが条坊で区画されたが、図 3.3 に見られるように主軸は傾いている。山と水で守られていたが、内郭を囲む外郭が築かれていた。

下倉論文の説く重要な建造物を見ていこう。宮城の南面正門から南郊へ続く御道が続くが、正門のすぐ外の西側に太社

と大莊嚴寺があり、御道を挟んでおおよそ東側に太廟・太学・明堂が並んでいる。御道を南へ行って外郭の外が天に祈る南郊で、太社や明堂などのおおよそ南方に円丘が置かれた。下倉論文はこれらの配置は南朝宋の時代のこととしているが、図 3.3 は、東晋・宋の時代にはもっと東にあった円丘が、梁の時代に御道の南の門の近くに移転したと記している。都城の南北の主軸は傾いているけれども、宮城の南門—明堂—円丘がおおよそ北から南へ直列するように配置された、と考えることができる。

そして、官の寺院大莊嚴寺がほぼこの南北線上にあって御



図 3.3 南朝建康の都城プラン(引用)

道に近接する場所にあることが注目される、と下倉は指摘する。500年ころには、仏教は南北の王朝で重要な地位を占めるようになったのである。500年代初期、皇帝菩薩と称された梁の武帝は王宮の北の門外に自分用の同泰寺をつくり九重の塔を建てたが、少し前には北魏の洛陽で宮城の南門の外にある大寺永寧寺に九重の塔が建てられていたという。華北と華南の王都にそびえ立つ二つの九重の塔はそのランドマークであった。600年代になると、仏教の広まった百済・新羅・倭国でも九重の塔を建てた。

第4節 王都が具えるべき特徴

ここまで東アジアの古代王都を眺めてきたが、日本列島の太宰府と藤原京をほかの王都とさらに具体的に比較し実効ある議論ができるように、この節で予備的に、王都が具える一般的な特徴を考察しておこう。

ずいぶん早くから文明が開花した中国では、古代に巨大な帝国ができてその王都はとても大きな都市であった。第3節で見たのはその王都に宗教的な建造物がどのように配置されていたかであった。しかし王都は、人々が大きな共同体をつくり王がその共同体を支配する場所として築かれ、しだいに発展したものである。王都はまず相当の人口の集積地という特徴をもつ。

領国を支配する政治の中心地としては、王都に王宮と政府の機関が置かれる。そして、世界のどこでも人々と社会に宗教的な思想が生まれ、王権は神権政治の様相を帯びていたか

ら、宗教的な施設も建造された。支配地が広がり政治体制が整い、宗教も形を整えるにつれて、増加する重要な建築物を効率的にしかも人々の心理に対して効果をもつように配置する必要が生じる。そうして、王都にはそれを特徴づけるプランが定着した、というふうに考えることができる。

王は領国を支配する政治の長であるが、領民に税を課して収集したから、領国にはそれに対応した物資の流通があり、一定の経済システムが形成された。そして王都は、物資の集積地だから経済システムの中心機能を果たしたはずである。王都にはそれに見合った経済活動をする人々が集まる。中国の都城に大きな「市」が一定のプランに基づいて配置されたのはその現われである。

その後の東アジアでは、西から世界宗教である仏教が入って来て広まると、王国の支配層が仏教に帰依するようになり、古くからの在来の宗教思想に加えて仏教がその地位を獲得するようになった。国家的な寺院が建設されるようになると、王都のなかで寺院をどのように配置するかも、王都のプランの要素となった。

こうして、歴史を経るなかで王都は、さまざまな機能を担う都市として一定のプランをもつようになった、と理解することができる。東アジアでは、巨大な支配領域をもつ中華帝国が周辺地域に及ぼす影響力が強くて、中国の都城プランは周辺の国々で王都を築くモデルとされた。

ここにもう一つ、都市としての王都が発展するには、何代もの王がその都市に王宮を置く継続性が必要なことをつけ加えるべきだろう。そうして初めて王都のさまざまな機能を担う諸施設が充実する。もっとも、いろいろな建造物ができて住民の住居も増えれば、王都の改造は容易ではなくなる。中国南朝の王都建康はそのことを示している。百済の泗泚は500年代の遷都によって新しく建設されたけれども、新羅の金城は古い王都をそのまま使用したから、王都のプランはあまりはっきり現われていないように見える。次の節では王都の規模に注目するが、都市として発展する条件を具えていたかという視点が欠かせない。

本稿の思索では、以上に整理した一般的な王都の特徴をおさえておくことが重要だと思う。上の諸点から、日本列島の古代史を見通す努力をすることは、『日本書紀』というジャンルに分け入る準備になるだろう。

太宰府と藤原京を考察の対象とすれば、おおよそ古墳時代からの歴史をおさえておく必要がある。古墳時代の列島のことは、中国南朝の歴史書の記述が短いけれども最も信頼できる。それが与えてくれる情報から、倭国という国がどういう状態にあったかおおまかな描像を描いてみよう。

そこには、400年代、倭国から五人の王が中国南朝に使節を送ったことが記されている。「使持節・都督・六国諸軍事・

倭王」という称号が、倭国王がどのような政治状況の中にいたかを語る。倭王は、海外に対しては「六国諸軍事」という称号を頼りに朝鮮半島南岸域を軍事的に支配しようとし、国内では、中華帝国から授与された「使持節・都督」という称号によって列島の支配権を強化しようとしていることが読みとれる。かなりの支配権をもち、五人の王の都はそれなりの都市だったと考えられる。さらに、五番目の倭王武が478年の上表文で「開府儀同三司」を自称したことは、その王都に中華帝国から見た地方行政機関「都督府」を開こうとしたことを教える。中華帝国はその権限を承認しなかったけれども、倭王武は自分の政庁の入り口に中国式に「都督府」と書いた大きな表札を掲げたと考えることが許される。

上の短い重要な語句は、倭の五王の都がわりあい大きな都市だったことを教えているのである。中国南朝がそれらの称号を倭国の王に与えたことは、中国の南北の王朝の歴史書に書かれた朝鮮半島の高句麗・百済・新羅の王に与えられた称号と比較して（四国のあいだに微妙な序列がうかがえるが）、倭国を基本的に高句麗・百済・新羅に匹敵する国家と認識していたことを示す。だから、倭王の都は百済や新羅の都とくらべて見劣りしない規模をもっていた、と考えなければいけない。400～500年代の倭国の都は時代にふさわしい相当の規模の都市だったと考えなければならないのである。

中華帝国へ使節を派遣することは、政治的な意図だけから

行なったのではない。朝貢という方式は中国との交易を含んでいた。使節派遣の背景には民間の交易もあったはずである。さかんに文物が倭国へ入ってきたと考えられる。その一つの表われが仏教の伝来である。『日本書紀』は500年代中期に百済から経典・仏像がもたらされたと書くだけだが、仏典が来ただけでは仏教が普及することにはならない。僧が来たはずである。それも朝鮮半島からだけではなく、中国大陸から僧が布教のために来たと考えべきだろう。漢字の「呉音」の多くが仏典に関係していることが、後世の倭国の漢字の発音に影響を与えるほど華南の発音で仏典を読む僧が倭国に来たことを教えている。

こうして、倭王の都は、海外の文物も人も入ってくる相応な規模をもつ都市だったと考えなければならない。時代は下るが戦国時代の守護大名大内氏の山口が参考になるかもしれない。大内氏は海外交易の港博多港もおさえ大きな領国を支配していた。西の都とも呼ばれることのある山口はけっして狭い平地にあったのではない。もっと広域を支配した鎌倉幕府（京都の朝廷と並立する武家政権）の鎌倉は、防衛が重視されそれほど広くない山がちな土地だが、海につながる要衝にあった。道は南北・東西の方向に走っていないけれども、「幕府」と政所は北の奥まった場所にあり、王都のプランをかすかに示している。

魏使が邪馬壹国へ来て以来久しぶりに、600年代初頭には、

隋が使節を倭国に送ってきた。その当時の倭国の王都のようすは、『隋書』の記述によって想像することができる。『隋書』が書くようなら、港には外国使節を受け入れる宿泊施設があり、おそらく都にも宿泊施設があった。港の迎賓館へ迎えに行ったのは200騎近くの儀礼兵で、隋使を先導するパレードをするほどの王都があり、そこには倭国王と会見する宮殿があったのだ。倭の五王のころよりも発展して、そのイベントができるほどの王都があったはずである、隋使がそこを「都」と表現できるほどの。

これで、600年代の倭国の王都を思い描く準備がおおよそできただろう。

第5節 藤原京以前の<大和>の王宮の規模

太宰府の歴史を知るのに、太宰府条坊と新益京(藤原京)との比較が重要なポイントである。現行の古代史パラダイムに沿う理解では、太宰府条坊は藤原京よりもあとに建設されたとされているから、先に藤原京について調べてみよう。天智王が築いた近江宮は、その子の大友王子が壬申の乱で討たれると見捨てられた。とって代わった天武王と持統王が置いた宮は飛鳥浄御原宮と呼ばれていた。694年に持統王がそこから藤原京に遷ったとき、宮殿はできていたが条坊はまだ建設途上だったと考えられている。文武王が王位を継承したのは697年、亡くなったのは707年である。

藤原京ができるまでの歴史の過程を理解するのに適した

図 5.1 には、調査が行なわれた当時の認識によって、後岡本宮や飛鳥浄御原宮の伝承地が書きこまれているが、その後の発掘調査によって、それらの宮は伝板葺宮の場所にあったと改められた（「大和の遺跡 飛鳥宮跡」、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）。わたしの二つの書物はその古い認識によって議論していて、その箇所は訂正する必要がある。新しい理解では、藤原京の前代のそれら三つの宮は、伝板葺宮の場所にあったとされる。遺構は造営が三期に分かれることを示し、I 期は舒明王の岡本宮、II 期は皇極王の板葺宮、III 期が斉明王の後の岡本宮と天武・持統王の飛鳥浄御原宮と考えられるようになった。建物は、すべて掘立柱建築で瓦葺でもないという。今では、舒明王から天武・持統王まで(629 年～694 年)のこの宮を飛鳥宮と呼ぶようになった。『日本書紀』は現代名飛鳥宮を“倭京(やまとのみやこ)”と呼んだのである。

持統王は、その飛鳥宮から京師と呼ぶことのできる藤原京へ王宮を遷した。図 5.1 には藤原京の古い想定条坊の範囲が書きこまれているが、その後の発掘調査によって、藤原京の条坊域はもう少し広がったと考えられるようになった。

「飛鳥・藤原宮発掘調査概報 I」(図 5.1 はそこからの引用)は、伝小墾田宮の場所も発掘調査し、そこが推古王(593～628 年)の小墾田宮である可能性が高いとしている(その後発掘が行なわれたか知らない)。ここでは、図 5.1 の青い四角で示したその場所に小墾田宮があった、と考えることにしよう。



图 5.2b 百濟の王都泗泚



图 5.2c 新羅の王都金城

図 5.2b・図 5.2c を、図 2.4・図 2.5 とくらべれば、古代の王都泗泚と金城がこちらの地図でどのくらいの広さだったかが分かるだろう。朝鮮半島は山がちだし、三国が対立していたので防衛上からだろう、百済や新羅の都は広い平地に出ていかに発展した。日本列島も同じく山がちだし、〈大和〉の王家がかなり広い奈良盆地の奥まった南東隅に宮を置いたのも、初期には防衛のことを考えた可能性を排除できない。しかし、『日本書紀』の語るところによれば〈大和〉の王家は安定した支配を続けていたのに、630年、王宮を小墾田からさらに奥まった飛鳥に移した。そして、内乱に勝った天武王も王宮をそこに留めた。

飛鳥がどういう土地柄か、図 5.2a を図 5.2b の百済の泗泚や図 5.2c の新羅の金城と比較してみよう。飛鳥が泗泚や金城よりも狭い土地だということが分かる。飛鳥宮周辺が同時代の泗泚や金城に匹敵するほどの都市の規模をもっていたか疑わしい。内乱に勝利して平和を勝ちえた天武王には、王宮を置く場所を選ぶ機会があった。600年代終期の相当に発展した時代、代ごとに宮を造営する〈大和〉の王家の慣例からも、広域を支配する王権なら王宮を構えるのにふさわしい場所へ出て王都を築くことができたはずだ。ところが、飛鳥から藤原京へ出ていくのに20年もかかった。それには『日本書紀』の語らない理由があったと考えざるをえない。

もし飛鳥宮の時代に〈大和〉の王家がほんとうに倭国を支配していたのなら、百済や新羅に対して『日本書紀』があれ

ほど傲慢な書き方をしたのが奇妙に思われる。百済や新羅の使者が飛鳥宮に来たら、その広がりなさを自国の王都とくらべてどう考えたらか。

このことをもう少し考えてみよう。図 5.1 と図 5.2a を見れば、推古王の小墾田宮の方が飛鳥宮よりも開けた場所にある。現行パラダイムによれば、推古王の 608 年隋の使節がそこに来たことになる。あとで見るが『隋書』と『日本書紀』の書くようなら、小墾田宮周辺には外交を司る役所、使節を迎える客館、出迎えた騎馬隊の詰め所などの施設が整っていたことになる。当然、そのほかもっとたくさんの政府諸機関があったはずだ。もちろん、王の宮は格の高い建築でなければならない。それら政府諸機関に勤める多くの官吏の住居もある。第 4 節で考えたように、そこには多くの住民が住む都市ができていたと考えなければいけない。たとえば、江戸時代の城下町は戦国大名の城下とは違う。古代とはいえ領域国家の王都は、前者のようにいやむしろそれよりも、政治機構・経済機構の中枢にふさわしい都市形態を具えていたはずだ。

もし小墾田宮の周辺がそういう都市だったのなら、なぜ舒明王は直線距離で約 1.5km も奥まったところに宮を移したのかという問いは、簡単に見過ごしにできる問題ではない。王が隋使と会見した立派な宮が古びてしまったので移転したのだろうか。政府諸機関を建て替えることはすぐにはできないから、遠くなって不便になっても我慢したのだろうか。

『日本書紀』が「75匹の飾り馬で“唐客”を海石榴市で迎えた」と書くから、その通りなら「海石榴市」に客館があったことになる。小墾田宮と海石榴市を地図に表わして、それを調べてみよう。図 5.3 を見れば、遠い隋から港に着いて奈良盆地に入った賓客を王の宮から直線距離で5.8kmも離れたところに宿泊させたことになる（『日本書紀』の編者が、港に宿泊した隋使を迎える『隋書』の記述「二百余騎郊勞」をこのように翻訳したのだろうか。それに続く「既_ニ至_ル彼_ノ都」はまもなく都に着いたと書き、着いたところが都に見えたと言っているのだが）。隋・唐の都城では、図 2.2 で示されているように、外国の使



図 5.3 小墾田宮と海石榴市

節を迎え入れる鴻臚寺は内城の中にあった（もっとも、後世長安に行った空海は、鴻臚寺が満室だったのか、「東市」の隣にあった外国人用の宿舎に泊まったそうだから、宿舎は「市」の隣にもあったことになる。『日本書紀』の編者は、つばき市に使節を泊めることがそういう例に適うと考えたのだろうか）。しかし、客館が図 5.3 に示される場所にあったとしたら、隋使を先導してのパレードなどの儀礼がほんとうにそこで行なわれたか心配になる。

ここに注記しておきたいことがある。インターネットで改めて『隋書』を調べたら、「[维基文库, 自由的图书馆](#)」の『隋書』「東夷伝」（日付は 2019 年 9 月 25 日）が、「倭王姓阿每、字多利思比孤」としていた。これまで、倭王の名は「多利思北孤」と書かれていると読みとって、「北」は「比」ではないかという議論があったが、「[维基文库, 自由的图书馆](#)」は「比」の方を採用しているのだ。「あめ・たりしひこ」なら倭国王の姓名にふさわしく「天の足りし日子」ということになる。

図 5.3 を見て、隋使が海石榴市に宿泊したと信じることができない人は、隋使はここに来たのではないという判断に進まざるをえない。そして、『隋書』が「姓阿每、字(あぎな)多利思比孤」という男性王とするのに、『日本書紀』が、そのときは女性だった<大和>の王が隋使と会見した記事を書き載せることを思い出して、『日本書紀』はこんな書き方をするのはと驚くほかはない。ここでは、女性である推古王は『隋

書』が姓名まで書いた倭国の男性王ではありえないことを、カッコに入れて考察していることに注意してほしい。

618年に中国の王朝が唐に交代すると、630年に倭国が遣唐使を派遣したので632年唐の応答使が来た。現行パラダイムの見方では、唐客は奈良盆地の奥まった飛鳥宮に来たのである。しかし上で考えたように、小墾田宮や飛鳥宮のあたりに、大興城と長安城から来た二度の使者が「都」と呼ぶことのできる都市がほんとうにあったか疑問になる。むしろ、藤原京が建設されるまで〈大和〉には、百済の泗泚や新羅の金城— 隋・唐を除く東アジアで標準的な王都 — に匹敵する都市がなかったのではないか。

こうして、飛鳥宮の規模は、645年からの「孝徳紀」に記述された「大化の改新の詔」に疑問を突きつける。大化二年(646年)の詔には条坊に区画した「京師」を建設せよと書かれ、「孝徳紀」は難波宮があたかも「京」であったかのように書くけれども、斉明王は飛鳥宮にもどって再び王位に就き、天智王は近江宮を建設した。「大化の改新の詔」の主張するほど大きく、百済の泗泚や新羅の金城に匹敵する規模があって、中国史書が「都」と呼ぶことのできるような「京」が建設されたのなら、斉明王が飛鳥宮にもどる必要はなかったし、天智王が新しく近江宮を建設する必要もなかっただろう。次の天武・持統王はまた飛鳥宮を王宮とした。まだ条坊建設中の藤原京の王宮に移ったのは20年後の694年だった。600

年代末まで、〈大和〉に「大化の改新の詔」の主張するような「京師」はなかったのである。

だから、『日本国はどのようにして成立したか』では、いわゆる「大化の改新」が実施されたところは〈大和〉ではない、と推論したのである。

第6節 太宰府条坊の設計思想

こういうわけで、図 2.3 で示した太宰府の条坊プランについて理解を深めることが重要となる。図 2.3 を見れば、太宰府では、図 3.2 に示された王都プランを構成する「政・祭」のシンボリック建築が中国の慣例通りの位置に配置されていないことに気づく。この点で、太宰府は、国家の寺院定林寺が朱雀大路に面して建てられている百済の泗泚と異なり、王宮・寺院の配置について新羅の金城とも異なる。さらに、同じ列島にあるのに藤原京とは設計プランに違いがある。これは考察すべき重要な問題である。

それでは、円丘や明堂あるいは大寺・霊台に当たる施設は、太宰府ではどこにあるだろうか。円丘は見当たらない。政庁の真東に観世音寺があり、これがシンボリックの大寺と考えられる。観世音寺の西に「学校院」と書かれていて、それは辟雍(太学)に当たると考えることができる。そして、政庁のすぐ東に「月山」がある。そこには「漏刻」が置かれていたと言われているから、霊台につながる場所と考えることが可能である。あるいは、図 2.2 の唐の長安城では、大明宮が外郭の

北東に隣接して造営されて高宗の代から宮殿になり、南の入り口「建福門」(赤い楕円)には漏刻が置かれたから、政庁のすぐわきの月山の漏刻はそれに対応している。また、太宰府の真東には大根地山神社があり、さらに東(さき)には神殿宇佐宮があることも忘れてはいけない。そうすると、中国の王都では「古教仏教」のシンボリック建造物が王宮から見て南の方向に整列されたのに対して、太宰府では方角を変えてそれらが真東の方向に配置された、と考えることができる。

『倭国はここにあった』で論じたように、太宰府が王の居住地となったのは、そこが、古墳時代に新しく制定された「太陽の道」— 真東にある大根地山と真西にある油山夫婦岩を結ぶ東西線 — の焦点だったからである。王宮ができるころには、祭祀の場所がその東西線上あたりにあって、すぐ南に王の住居があり、その南に接して政堂があった、と推論した。だから、中国では南北線が尊重されたが、倭国では古来の「太陽の道」の考え方から東西線を尊重して、「古教仏教」のシンボリック建造物を東西方向に配置したと考えてよいだろう。

しかし、第3節で中国の都城プランの変遷をたどって分かったように、倭国でも、図 2.3 に示されたような王都が完成するまでに、歴史的な推移があったと考えなければならない。その考察には、後世の「太宰府」や「太宰府政庁」という用語が適切でないことに留意しておく必要がある。太宰府を焦点とする「太陽の道」が制定された古墳時代にどうしたこと

が起きただろうか。この「太陽の道」を象徴化し王の居住場所を神聖化するのに実行されたのが、まず太宰府の真東に宇佐宮を創建することで、続いて太宰府の真北に宗像大社を創建することだった、とわたしは推定した。そして、「倭の五王」の時代にこの「太陽の道」が制定され、二つの神殿が創建されたのは「倭の五王」のうち中国南朝の史書に最後に登場する倭王「武」のころだ、と推測した。500年前後のことである。

この推論が正しければ、倭国が中国南朝へさかんに使節を派遣していた時代に、太陽神と高天原の神々のための大きな神殿が建設されたということになる。倭国の使節たちは何度も南朝の王都建康に行って、図 3.3 に示された王都のありようを観察できた。宮城の南方に太廟・太学・明堂や太社・大莊嚴寺、南郊円丘が配置されていることを知ったはずである。そのことが宇佐宮と宗像大社の建立を促した、とわたしは推測する。建康では、宮城をつらぬく正中線が南北方向から傾いていることが、思想的に重要な方角を振らせるアイデアを助けたかもしれない。ともかく、倭国では「太陽の道」東西線が主軸である。だから、まず宇佐宮が王の住居から真東すなわち大根地山の真東に建設された。このアイデアは、中国の王都にあったプランよりも壮大なものだが、油山夫婦岩から 21.5km 先の大根地山を望む東西線をさらに日の昇る海岸近くまで延長するという考えが浮かんで実現したのだろう。

ところが、『日本書紀』の「一書」が、「日神の娘である三女神は初め宇佐洲にいたが今は宗像にいる」と書いているように、あとで宗像大社が加えられた。「一書」は、日神が三女神に(海の北の)道中に降り居て「奉助天孫而、爲天孫所祭也」と命じた、と書く(この神勅は今も宗像大社に掲げられている)。沖ノ島・大島・宗像と三社からなる宗像大社で三女神が沖ノ島に宿る太陽の祭祀を司るようになると、宗像大社がそこから天を祀る円丘の役目を負うようになった、と考えることができる。だから、宗像大社は王宮を貫く南北線上にあることを求められたのだ。すると、中国の「礼」の方式では東の社は「宗廟」だから、宇佐宮は宗廟になったのだ(そして、三社様式の宇佐宮の二社には、天孫「ニニギ」とその母「萬幡(よろずはた)トヨアキツシヒメ」(八幡の神)が祀られるようになったとわたしは推測する。ちょうど、三雲南小路遺跡そばの細石神社と高祖神社の祭神が、母の「コノハナノサクヤヒメ」と子の「ヒコホホデミ」であるように。「ヒコホホデミ」の父が天孫「ニニギ」である)。

500年代中期になると、宇佐宮と宗像大社で具象化された高天原の神々への崇拝に、さらに、海外から伝来した仏教がかぶさるようになった。すなわち、中国で起きた下倉渉の言う「儒仏混淆」が、倭国では「神仏混淆」へと進むことになったのである。このようにとらえれば、太宰府のプランにある思想は中国の思想に通じるものだけでも倭国独自の形で現われた、と理解できる。この意味で太宰府条坊のプラン

は独特なものなのである。

それを藤原京と比較すれば、王宮や大寺の配置が異なるけれども、藤原京が真南にある文武天皇陵を介して皇大神宮とつながっていることは、古来の神々の崇拝という点で太宰府をモデルとしていることが判る。しかし、王都そのものの設計思想は太宰府とは異なる。このことは、藤原京の整備がまだ途上にあった段階で建設が始まった後継の平城京で確認することができる。

図 6.1 に平城京の条坊図を示そう(「平城京条坊図」、奈良県立教育研究所)。平城京では、唐の長安城のように王宮が条坊の北端に置かれ、藤原京のプランから修正されている。だが、重要な大官大寺=大安寺は藤原京から移されて前と相似な場所に建てられ、藤原京のプランを尊重している。外京が付け

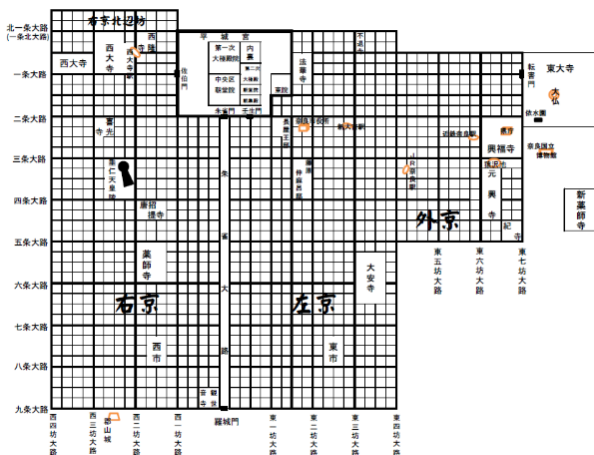


図 6.1 平城京条坊図 (引用)

加えられた意図はよくわからない。重要なのは、藤原京がもっていた皇大神宮との関連づけが失われたことである。列島古来の神々を崇拜する宗教思想の点で、建設されたばかりの平城京は太宰府を継承できていなかったのである。

この相違は、文武天皇(天之真宗豊祖父天皇)を父祖とする王朝にとって無視できない問題だったと考えられる。大宝令で太政官と並ぶ神祇官までにおいて神社信仰を尊重したのに、文武天皇の子の聖武天皇の代に、全国に国分寺と国分尼寺をつくって仏教をもう一つの公認宗教とすることになった。そのとき総本山と呼べる東大寺が王都のどこに配置されたかが事の真相を明かしている。この問題はすでに『日本国はどのようにして成立したか』で論じているので、ここでは重要な論点だけを述べよう。

図 6.1 が、東大寺が条坊の外に追加されたことを明示している。東大寺は、太宰府での観世音寺と相似な位置、王宮の真東に建設された。強調すべき点は、東大寺建立の際に宇佐宮がとても重要な役割を果たしたことである。上で述べた考え方からすると、仏寺観世音寺は、神社である宇佐宮と宗教思想の上で重なるように意図して王宮の真東に配置された。そして皇大神宮は、古くから神社の筆頭だった宇佐宮をモデルとして建てられた。だが平城京では、藤原京にあった文武天皇陵を介しての皇大神宮とのつながりが失われた。だから、王都平城京に東大寺を建立したとき、落慶に際し宇佐宮の八

幡の神が神輿に乗って東大寺に乗り込む必要があったのである（東大寺境内に八幡宮も建てられた）。建立のときから、東大寺金堂の毘盧遮那仏（大日如来）は太陽神（日神）と重ねて思念されたと考えられる。「神仏習合」が進むと、本地垂迹説で天照大神は大日如来と見なされるようになった。

現行パラダイムでは、藤原京が建設されたあとに太宰府条坊が建設されたとされている。ところで、太宰府条坊の大官大寺の配置は東アジアで独特なもので、藤原京のプランとも異なる。そして、太宰府条坊よりもあとの平城京は藤原京のプランを踏襲して完成した。ところが、のちに平城京は鎮護国家の寺院東大寺を建立するとき、太宰府条坊と相似な位置にそれを配置した。独自のプランの太宰府条坊は、〈大和〉の王権によって建設されたとし、建設の順番を、藤原京→独自の太宰府条坊→平城京→東大寺の追加と考える通説に異議を突きつける。あの位置に東大寺を追加したことは、古来の宗教思想を受け継ぐ太宰府の条坊プランが列島で尊重されるべきだと考え直されたことを意味するだろう。

第7節 太宰府条坊までの歴史を読み解く

第1節の図 1.1 は古墳時代以来倭国王が「太陽の道」の焦点太宰府にいたことを証言する、というのが前著『倭国はここにあった』の結論である。そして、新著『日本国はどのようにして成立したか』は、「藤原京を建設した王家は、文武

王のとき大宝という元号を建て、列島全域を支配する新王朝となった」という結論をもたらした。それを端的に示すのが図 1.2 なのである。この見方は、前節までの条坊プランなど外形的に現われた事実を材料にした議論と整合的である。

現行パラダイムに従う見方では、ずっと天下を支配していた<大和>の王権が、藤原京の建設を始めたあと、地方行政都市太宰府を条坊に区画した、と考えられているが、第 6 節までの議論からすればその理解は疑問である。先入見をもたずに、「太宰府」と呼ばれている場所にあった行政機関がいつごろ設置され条坊はいつ建設されたかを考察しよう。

i. 行政機関「太宰府」はいつ設置されたか

一般に、太宰府は「7 世紀後半に、九州の筑前国に設置された地方行政機関」と言われている (Wikipedia)。具体的な年代を含んだこの理解は、太宰府について一番古い文献『日本書紀』に基づくと考えられる。だから、上の通説を再検討するには、『日本書紀』で「太宰」および関連する語句が登場する文章を点検する必要がある (ただし『日本書紀』は、地元太宰府で用いられる表記「太宰」の代わりに「大宰」と書く)。長くなるけれども、「大宰」および関連する語句をすべて表にリストアップしてみよう。表 1 は、『日本書紀』のジャングルで道に迷うことがないように、意味の通じる最短の文単位を箇条書きにしたものである (http://www.seisaku.bz/shoki_index.html/「日本書紀 全文検索」から)。

--- 表1 『日本書紀』に出現する「大宰」など---

推古紀 609年夏四月丁酉朔子、筑紫大宰奏上言「百濟僧道欣…」。

皇極紀 643年、筑紫大宰、馳驛奏曰、百濟國主兒翹岐…。

筑紫大宰、馳譯奏曰、高麗遣使來朝…。

孝德紀 649年、即拜日向臣於筑紫大宰帥。

齊明紀 661年、天智と共に筑紫に行ったが「大宰」は出ない。

天智紀 663年、大唐軍將率戰船一百七十艘、陣烈於白村江…。

664年、百濟鎮將劉仁願、遣朝散大夫郭務悰等、進表函與獻物。

是歲、於對馬嶋・壹岐嶋・筑紫國等置防與烽。又於筑紫築大堤貯水、名曰水城。

667年、百濟鎮將劉仁願、遣熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等、送大山下境部連石積等於筑紫都督府。

668年、以栗前王、拜筑紫率。

669年、以蘇我赤兄臣拜筑紫率。

671年、以栗隈王爲筑紫率。

對馬國司、遣使於筑紫大宰府、…從唐來曰『唐國使人郭務悰等六百人…總合二千人乘船卅七隻、俱泊於比智嶋…』

天武紀 672年、壬申の乱の記事に、筑紫大宰栗隅王…。

673年、因命大宰、詔耽羅使人曰…。

676年、筑紫大宰三位屋垣王…。

677年、筑紫大宰獻赤鳥。則大宰府諸司人賜祿各有差、…。

679年、吉備大宰石川王

682年、筑紫大宰丹比真人嶋等、貢大鐘。

八月、筑紫大宰言、有三足雀。

683年正月、百寮拜朝庭。筑紫大宰丹比真人嶋等、貢三足雀。

685年、…是日、筑紫大宰、請儲用物。

持統紀 686年、筑紫大宰、獻三國高麗・百濟・新羅百姓…。

687年、筑紫大宰獻投化新羅僧尼…。

筑紫大宰便告天皇崩於霜林等、即日霜林等皆着喪服…。

688年、大宰獻新羅調賦、金銀絹布…。

689年、筑紫大宰粟田真人朝臣等、獻隼人一百七十四人…。

賜衣裳筑紫大宰等。 詔筑紫大宰粟田真人朝臣等、

賜學問僧明聰…。 以淨廣肆河内王爲筑紫大宰師…。

690年、大宰・國司、皆遷任焉。 遣使者詔筑紫大宰河内王

等曰「饗新羅送使大奈末金高訓等…。

691年、詔曰「直廣肆筑紫史益、拜筑紫大宰府典以來於今

廿九年矣。…」

692年、詔筑紫大宰率河内王等曰「宜遣沙門於大隅與阿多、

可傳佛教。

694年、以淨大肆贈筑紫大宰率河内王、并賜賻物。

以淨廣肆三野王拜筑紫大宰率。

表1を見ると、『日本書紀』は、661年に齊明王や天智が筑紫に行ったときそこにどのような機関があったか説明せず、「白村江の戦いで敗北して烽火台や水城を築いた」など時代状況を語る一連の記述のなか、671年に初めて「大宰府」という語を出現させるだけである。論理の飛躍なしに通説の

ように踏みこんだ結論を下すことはむずかしい。通説はなにか別の判断を導入しているのだ。その前提とは、「当時行政機関を設置するとすれば列島を支配していた<大和>の王権だ」とする現行パラダイムだろう。その見方では、<大和>の王が初めて筑紫に行ったとき当該の行政機関が設置されたという拡大解釈が成り立つのである。しかし、その前提を取り払えば、通説にしっかりした根拠があるわけではない。

まず、前提なしに考えてみよう。『日本書紀』で、「大宰」という文字は推古紀よりも前に出ず、推古王の609年に「筑紫大宰」の語で初めて登場する。天智紀より前にも後にもこの語句が一番多く使われている。次に、大宰に帥・師・率がつく例が多い。その場合には長官という意味がはっきりする。行政機関という意味が明らかな「大宰府」は、天智紀・天武紀・持統紀にそれぞれ1回出る。日本語の用法を考えると、歴史的にもまた現代でも、行政機関の呼び方にはある程度ゆらぎがある。たとえば、新聞の書く「政府」という言葉は、行政機関としての政府の長から高官まで意味することがある。明治初期の「太政官」なら太政官府の建物やその場所も指すことができただろう。だから『日本書紀』も、大宰府・大宰という言葉も、行政機関もしくはその長官などを意味して揺らぐように使用している、と理解することができる。だから、辞書が「大宰は、大宰府の略もしくは大宰府の官人」と書くのである。習慣的な使用によって、太宰府という言葉

は「太宰府」のあった場所を指すまでになった。

表1全体をすなおに読めば、「大宰」は、推古紀に初めて登場するころ筑紫に開設されて、600年代を通して存在した行政機関と見なすのが、最も合理的である。最初期の推古紀や皇極紀で日づけに続けて「筑紫大宰…」と書く用語法は、その機関が既知であるかのような書きぶりである。推古王のころから「大宰府」は重要でよく知られた機関としてあった、と考えることができる。

漢字「宰」は、「きりもりする」という意味で「主宰」などと使われ、また、「宰相」では王の相談役を意味する。「大宰」には「宰」の前に「大」までついているから、字義どおりならのちの太政官か中国の宰相が率いる機関に相当することになる。ところが、その重要な官に対して『日本書紀』は、「筑紫大宰が奏上して言う…」や「筑紫大宰が馭馬で奏(上)してもうす」などと書く。言うまでもなく奏上したところは<大和>という書き方である。『日本書紀』は全編こういう筆法で書かれ、百済や新羅さらに中国の使節に対してさえ見下すような書き方をする。その筆法がわれわれを呪縛して、文章が意味する情報の正確な把握をむずかしくする。

語の用法に矛盾を含む今の例を考えてみれば、筑紫に置いた機関になぜ「大宰」というような大げさな名をつけたか疑問が生じる。『日本書紀』の主張するように天下を支配していた<大和>の王が行政機関をつくるとすれば、<大和>に「大

幸」というような名の官をもうけ、筑紫には出先の機関にふさわしい名をつけるのが順当である。〈大和〉にそういう名の行政機関がなくて筑紫に「大宰」という機関があることは、むしろ、すでに筑紫にそういう名の行政機関があったことを示唆する。「大宰」がどういう機関か説明せずに推古紀に初めて現われるのは、そのような状況を示している。太宰府という行政機関は斉明王や天智が筑紫へ行く前からそこにあったのだろう、という推定に導かれる。「大宰」という語を上のように考えてはじめて、のちに「大宰府」を「遠の朝廷（とおのみかど）」と呼ぶようになったいわれを理解することができる。こちらの呼び方には「朝廷」という語まで現われる。

表1には、一つだけ「吉備大宰」という語が現われて、「大宰」は筑紫だけに置かれたという理解を妨げる。だが、持統王の688年と690年の「大宰」という単独語は、外国に対応し国司など国制に関係する語句といっしょに現われて、「筑紫大宰」を指していると見えるから、ただ「大宰」と言えば「筑紫大宰」を意味するほど「筑紫大宰」が重要な機関だったと考えてよいだろう。天智紀には任命の記事に「筑紫率」という語も現われるが、それは「筑紫大宰率」とは異なる役職なのかもしれない。天武紀下に一度「周防総令所」が、『続日本紀』文武紀第一に筑紫・周防・吉備の「総領」という語が一度現われる。これらの語句は先の「吉備大宰」に通じ、670年代末から、中央政府にとって重要な国に国司よりも権

限のある役職をもうけた可能性を示唆する。100年近い年月のあいだには制度の変更があったと考えておくべきである。

以上のことを考慮した上で、『日本書紀』の記述から夾雑物を除いて得られる基本情報をまとめると、【600年ころ筑紫に「大宰」という行政機関が設置され、その官府は「大宰府」と呼ばれ、機関の長官は漢字で帥・師・率などと書かれた】、となる。

ii. 「大宰府」とはどのような行政機関か

それでは、「大宰府」はどのような行政機関だったのか、さらに考えてみよう。表1を見れば、最初期の登場から、筑紫大宰は対外関係の記事に現われる。外交権は主権をもつ国王に属すから、対外関係の記事に現われる筑紫大宰が重要な機関だったことが判る。

表1はこの問題を考える導きの糸を含む。天智紀の667年の記事に「筑紫大宰府」を意味して「筑紫都督府」という言葉が現われる。二つの語は置き換え可能なのである。「大宰府は漢語都督府の日本名」と書く辞典があるが、『日本書紀』はここにその用例を示している。『日本書紀』は中国南朝の歴史書が記す倭の五王のことに沈黙し、「都督」という語句が出るのは667年のここだけである。ここに「筑紫都督府」という言葉が現われたのは、文の出だしの「百濟鎮將劉仁願

(唐の百済占領軍司令官)が熊津都督府の県令を派遣して…」に対応させたからである。百済を倒したあと、唐は百済の王族を都督に任命して熊津に都督府を開かせ、占領軍による間接統治を行なった。五・六世紀中国の南北朝は、高句麗・百済・新羅・倭国の王に都督の称号を授与したが、都督府を開く許可を得たとき国王の官府は都督府でもあった。唐は、百済と高麗を倒したあとそれに準じたやり方を採用したのである。だから、このとき唐側から見れば、王のいる都を都督府と呼ぶことができたのである。つまり中国流の文脈では、「筑紫都督府」と呼ばれた「筑紫大宰府」は王都だったことになる。その王とは、唐が戦った相手の倭国の王にちがいない。

『日本書紀』が表1の667年の記事で筑紫の太宰府を都督府という言葉で表現したことは、筑紫の太宰府がかつて都督府だったこと、その場所に都督府から太宰府へと推移した歴史があったことを暗黙に認めているのである。

太宰府は倭国の王都というこの理解は、歴史解釈として無理なものではない。中国南朝の史書が、400年代に五人の倭王が使節を派遣してきて、四人の王に都督の称号を与えた、と書くのだから。しかも五人目の倭王武は、上表文に「開府儀同三司」と自称していると書いた。都督府を開いたと考えてよい。だから、倭国の王都には都督府があったと考えることができる。ところが、『日本書紀』は中国南朝との外交と誇ることのできる「都督」の称号に口をつぐむ。それなのに、現行の古代史パラダイムを信奉する人は、『日本書紀』の記

載する〈大和〉の王たちをなんとか五人の王に当てはめようとする。そこにこそ、歴史学の方法として無理がある。

ここまで来たら、前二著の提起する王朝交代論の見方に立って歴史解釈を進めてもよいだろう。その結論を要約すれば、中国の王朝交代規範からして、【文武天皇が大宝という元号を建てたとき新しい王朝の日本国が成立した。それ以前には筑紫に、中華帝国から二つの金印をのちには都督の称号をもらい、600年代には隋と唐に対して天子と称して外交関係をむすんだ倭国王たちの王朝があった】というものである。

それを端的に示すのが第1節の図 1.1 と図 1.2 である。文武天皇陵が藤原京を皇大神宮と結びつけるころまで、古墳時代から図 1.1 の「太陽の道」の焦点太宰府に王がいたのなら、400年代の中国南朝に使節を送った倭王もそこにいたのだ。

この理解は、現地で「太宰府」と表記する理由を言うことができる。「大宰府」と「太宰府」のいずれも王国で最高の行政機関を意味する語と言えるが、「はなはだ大きい」を意味する「太」を用いて「太宰府」と書けば、王国で唯一の機関であることをよく指示できる。そうであれば、「吉備大宰」という役職がつくられても混同することがない。逆に、『日本書紀』はそういう読み方を嫌って、「太」と表現しないで意味を弱めて「筑紫大宰」と書いたのかもしれない。

iii. 都督府から太宰府へ王都の発展

現在太宰府と呼ばれているところは、『宋書』に記録された421年の倭王讚のころから倭国の王都だった、という理解が再確認できた。『晋書』は、それより前の413年に倭国から入朝があったと記録している。この見方に立てば、前節までの王都についての議論を一步進めることができる。

478年の倭王武の上表文によって、そのころ倭国の「都督府」が開設されたと推定しよう。武の名は『梁書』で502年まで収録されているから、都督府はそのころまであったと考えることができる。そのあと倭国は中国の歴史書に記録されていないので、倭国の状況を知ることができない。しかし、国家としての倭国の朝貢貿易はなかったとしても、すでに述べたように、民間の交易・交流はあったと考えるのが自然である。漢字の読みに多くの呉音があることが、中国華南との通交を物語る一つの証拠である。今太宰府と呼ばれている場所には、500年代も「都督府」と呼んで考察できる王都があったと考えてよいだろう。それ以前の400年ころから478年ころまでは、倭王武の上表文から推測して、王都が都督府と呼ぶことができるようになるまでの発展期と考えることができる。それを仮に「前都督府」と呼んでおこう。

300年代には倭国は中国史書に登場せず、お隣の百済や新羅もまだ発展途上と見える。そして、『日本書紀』から時代の進展度を十分読みとることもむずかしい。明瞭さを失わないように、300年代のことは考察の対象期間からはずす。

そうすると、400年代から600年代末までの倭国の王都を、

おおよそ「前都督府」・「都督府」・「太宰府」の三つの時期に分けて考えることができる。第4節の王都についての一般的な考察が、その推移を考えるのに役立つだろう。

『倭国はここにあった』の議論によれば、太宰府(場所)を焦点とする「太陽の道」は「前都督府」の時代に制定され、「太陽の道」のシンボル宇佐宮と宗像大社は「都督府」の時代に創建された、とすることができる。そして、弥生時代の「太陽の道」が、倭国王は新しい「太陽の道」の焦点太宰府(場所)に住居を置いただろうと推定させる。したがって、400年代初期から、同じ王家の親・兄弟がその場所で王位を継承し、王の宮のまわりにしだいに都市が形成されていった、と考えることができる。この点で、先に見たように<大和>の王の宮が代ごとに築かれたことと大いに異なる。<大和>では都市が発展する条件が欠けていたのである。これに対して、太宰府(場所)で王宮が都督府となり、中国の都督府をお手本とする機構が充実していくと、町には商人また住民がいつそう増えて都市が発展していったと考えることができる。

ただ、530年ころ、『日本書紀』の継体紀が、「筑紫国造磐井、ひそかに叛逆をはかり……」と記し、末尾の註で継体王の死亡年を推定するのに『百濟本紀』の「日本天皇及太子皇子がともになくなった」という文を引いている。また、継体王も<大和>の王位を篡奪して王家を継体したと思われるから、500年代前半はまだ争乱のある時代だったと推測され

る。磐井の墓とされる筑後の大きな古墳も、まだ競争の時代だったことを物語る。これらのことから、後漢から金印をもらって以来の倭国を、単調な政治状況の連続と見なすのは正しくないだろう。『三国志』の記述によれば、200年代の朝鮮半島では国々が分立していた。百済や新羅が王朝として登場するのは300年代とみられる。倭国でも卑弥呼は共立されて王になったと記されているから、王の支配権は強くなかったと見るべきである。500年代まで倭王の支配権は強化の過程にあったと考えるのがよいだろう。すでに倭国で一つの王朝の権威が伝統として確立していたとしても、上で触れた情報を考慮して、王権の継承には権力闘争がともなった、そして、政変などを契機に政治的な権力に強弱の波があったと想定することは、世界の歴史の一般的なあり方に適合するだろう。

しかし、後世の文献『二中歴』や朝鮮半島の『海東諸国紀』が、日本列島で500年代中期から連続する年号を使用したように記すから、古墳時代は終末期にあったのだ。ちなみに、新羅が元号「建元」を建てたのも同時代の536年である。朝鮮半島でも日本列島でも時代の流れは、王の統制権が増して国内の平穏へ向かって進んだ、と考えられる。

500年代中期から平穏になったとすれば、太宰府(地名)にあった王の都は相当な都市へと発展したと想像できる。その現われが『日本書紀』に登場する「筑紫大宰」だろう。つまり、

倭国の中央政府が「太宰府」という名になった、と考えることができる。おそらく600年よりも前に「太宰府」やほかの機関・施設を整備して政府の面目を一新した上で、倭国王「あめたりしひこ」は600年に遣隋使を派遣した。2回目の607年の遣隋使の帰国に合わせて隋の使節が来たときには、客館など迎え入れの準備もできていただろう。このように考えれば、行政機関「太宰府」の設置は、倭国の政治体制の進展という大きな歴史の流れのなかでとらえることができる。

倭国は、隋へ五度使節を派遣したが、隋から唐に代ると、630年に最初の遣唐使を派遣した。その帰国に合わせて632年、唐もまた使節を倭国へ派遣した。以後653、654、659年にも倭国から使節が唐へ行った。外国から中華帝国への使節派遣は多くの文物を得るためだったが、隋・唐の時代には、倭国王が天子と自称したからだろう、称号を授かることは目的ではなくなった。600年代前半は、倭国にとって、中国南朝へ使節を送った400年代に継ぐ第二の中国文明流入の時代だったのだ。

倭国は発展期にあった。それなのに、〈大和〉の王家で推古王を継いだ舒明王が小墾田宮から奥まった飛鳥宮へ移ったのは、発展する倭国にふさわしい政策とは思えない。ところが『日本書紀』は、孝徳紀に646年からの「大化の改新」の長い詔を引用して、時代の趨勢を記述しようとする。しかし、その詔の一つの柱である「条坊で区画された京師を修める」

事業は奈良盆地で行なわれなかった。考古学的調査が、その時代の飛鳥宮はそういう規模の京ではないことを明らかにしている。奈良盆地に初めて条坊で区画された大きな都が出現するのは、50年もあとの694年の藤原京である。「大化の改新」は<大和>で行なわれたことではなかったのである。

これに対して、都督府のあったところに600年ころに太宰府が設置されたという見方に立てば、建築から40年以上経過したその太宰府をはじめ政府諸機関を整備しなおし、発展した都市に碁盤状の道路を通して唐の長安のようにする計画がもちあがってもおかしくない。つまり、「改新」は太宰府を都とする倭国で実行され、王都が京師と呼べる規模になった、と歴史の流れにふさわしい理解が得られる。

図 2.3 太宰府条坊図と下の地図 7.1 を見れば、王都が大きな計画として建設されたことが分かる。現代の太宰府市周辺は都市開発が進んで周辺の山が削られ住宅が建てられているので地図 7.1 は平地の広さを明瞭に示さないが十分に広く、百済や新羅の王都に勝る規模だった、と考えてよい。倭国の威勢は上がっただろう。それが、孝徳紀に記されているように、百済や新羅の使節に対して詔で「明神御宇やまと天皇」と名乗るようにさせたのだろう。斉明王とその家族はそういう京師太宰府へ出かけたというのが、前著『日本国はどのようにして成立したか』の推論である。

しかし、その誇大な自己評価が、660年の百済滅亡の際に



図 7.1 太宰府の地形

百済の敗軍に加勢して唐軍との戦争へ向かわせた。そして、白村江での敗戦が倭国の威勢を暗転させることになった…。

第 8 節 太宰府条坊プランを体現する建造物

i. 建造物に現われた「政・祭」の思想

歴史の解釈を単にくりかえすのはやめて、大宰府条坊のことを具体的に観察しながら、どういう歴史があったか関連づけて考えよう。

[i . a]

条坊プランは建設工事で具体化される。工事は列島で現代

も行なわれるように神事で始まったことだろう。その場所は、「太陽の道」崇拝からすれば、“政庁跡”の北側にある丘の、東に大根地山を望むあたりということになるだろう。条坊を描くための地割はそこから始まったとするこの想像は真実に近いと思う。

条坊北端の緯度を知るために、図 2.3 太宰府条坊図の作成者井上信正氏に問い合わせたら、グーグル・マップから得た北緯約 33 度 31 分 \div 33.517 度という暫定値を教えてもらえた（原図は日本測地系第Ⅱ系の地図に描かれている。次の桁の数値を知りたいと思い、太宰府市教育委員会「太宰府条坊跡 26 平成 16 年」p5 に条坊四周を書き入れた地図を見つけたのでそれを拡大し、条坊北端の何点かをグーグル・マップと照合して、北緯約 33.5174 度という概算値を得た。誤差は 0.0002 度を超えないだろう。現在の地図を見ると“政庁跡”中心軸の真北は日管寺へ入る道と西側の木の茂る境界あたりで、元は丘だったと考えられる。条坊の北端は今の日管寺あたりである）。条坊北端の緯度約 33.5174 度は、大根地山三角点の緯度 33.5195 度と油山夫婦岩の緯度 33.5188 度よりも 0.002 度程度南で、差異は南北の距離にして約 230m になる。

『倭国はここにあった』で、古墳時代に大根地山から真東の大大分県まで測量を実行して宇佐宮の場所を選定したから、宇佐宮が大根地山の真東にあるのだと論じた。図 2.3 には、その宇佐宮—大根地山—油山夫婦岩を結ぶ東西線を書き入れたが、拡大した地図で見れば条坊北端からのずれは小さく

ない。測量の基点と考えているのは、図 2.3 で 0 点と書き入れた地点である。そこから距離 8.67km にある大根地山がどの方向に見えるか計算すると、 $231/8670 \div 0.0267\text{rad} \div 1.52$ 度、すなわち真東よりも北側に約 1.5 度の方角である。無視できる角度ではない。けれども、方位磁石のないとき東西方向を知ることの困難を考えれば、大根地山はほぼ真東にあるとすることができる。古代に方角を知るとすれば日時計で太陽の南中する方角を求める方法がある。東西方向はそれに垂直な方向である。しかし、その方法で南北方向を決定すれば、誤差が生じると考えなければならない。実際、図 2.3 で認められるように、条坊の南北軸は南へ行くとわずかに西側に振れている。このことはあとで述べるが、“政庁跡”の中心軸が測量の誤差によって南北方向から微小にずれていたせいだと考えられる。

このことを踏まえた上で、図 8.1 に示す 0 点から東方を望んだときの眺望を見てほしい（杉本智彦作成ソフトウェア「カシミール 3D」を用いて描いた）。図上端に赤字で書かれた 90° の方向が真東である。目盛りが示されていれば大根地山山頂が真東にないことが分かるのだ。図 8.1 には春分・秋分の日の日の出も描かれているが、その日の太陽は山頂よりもかなり南側の稜線から昇ってくる。また、大根地山の真西から見ても同様で、春分・秋分の日には太陽が大根地山山頂から昇るように見える場所は、大根地山よりも緯度の高い場所なので

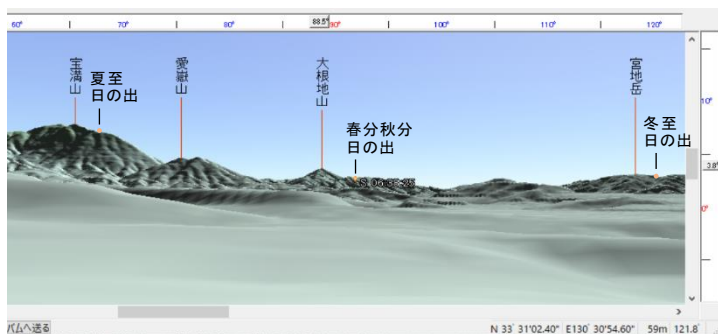


図 8.1 太宰府政庁跡北の0点から見た東方の眺望

ある。『倭国はここにあった』でふれたが、春日市にある日
 拝塚古墳(東経 130.439 度、北緯 33.514 度)から春分・秋分の日
 に日の出を拝めばちょうど大根地山山頂から昇るように見
 える。それは次の図 8.2 によって確かめられる。その古墳が
 どうして日拝塚という名で呼ばれるか、この図を見れば一目
 瞭然である。この地域で最大の古墳の被葬者は、春分・秋分
 の日に大根地山から昇る日の出を拝むことを願ったのだ。

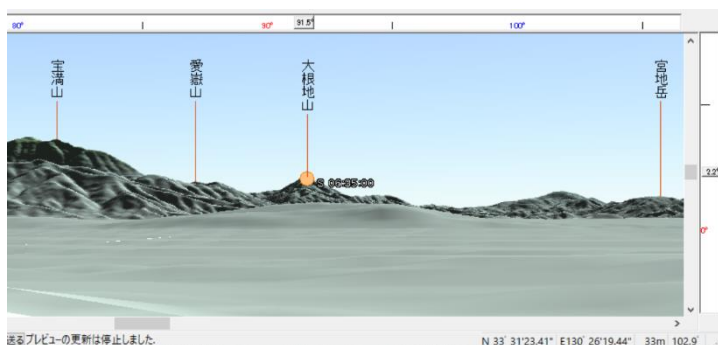


図 8.2 日拝塚古墳から見た春分・秋分の日の出

今まで大根地山と油山夫婦岩を結ぶ東西線を「太陽の道」と呼んできたが、その言葉を概念的にとらえておかなければいけない。それでもやはり、大根地山が「太陽の道」を指定する神聖な山と考えられて、大根地山を通る東西線を「太陽の道」と思念することが行なわれた、と考えてよいだろう。だから、その頂上にイザナギ・イザナミからの天神七代と日神からの地神五代を祀る大根地神社が建てられたのである。王の宮が春日市あたり（須玖岡本遺跡はそこにある）から太宰府へ移されたのは日拝塚古墳の被葬者よりも前の時代とする想定は有望である。そのときには太陽を祀る祭祀の場所が設定されていたと考えることができる。しかし、今回判明した条坊北端の緯度からして、大根地山を通る東西線上の山の中に入った場所では実際面でつごうがわるいと判断された、と推測できる。付近の地形から判断しても、現在日管寺のある丘に設定すれば、すぐ南の場所に王の宮を建てることのできる。

以上のことを踏まえた上で、今までのように、大根地山—油山夫婦岩を結ぶ東西線を「太陽の道」と呼ぶことが許されるだろう。図 8.1 には夏至と冬至の日の出も示されている。それを見れば、大根地山が春分・秋分の日の出の目印、宝満山が夏至の日の出の目印、宮地岳が冬至の日の出の目印であることが分かる。太陽は、春分・夏至・秋分・冬至の日に三つの山のちょうど頂上から昇るのではないけれども、三つの

山はやはり季節の節目を教える神聖な山と考えられただろう。その意味で、図 8.1 の 0 点は「太陽の道」の焦点と呼ぶことが許される。福岡都市圏の弥生時代の三遺跡でと同じように、古墳時代にもそういう「太陽の道」の焦点で祭祀が行なわれた、とわたしは想像する。

以上の条件付きで、太宰府条坊北端の緯度は、「太陽の道」概念を追認し、その概念を基にしてたどってきた歴史像が誤りではないことを証言する、とすることができる。

南北の基軸はどのようにして決定したか。神事が行なわれたと想像する場所は、真北から宗像大社が指し示す場所のほずである。しかし、大根地山—夫婦岩のように見通す視標がない。あらためてその南北線を測量しても、都市の中心軸を指定するには誤差が大きすぎる。現地で基点を決定するしかない。太陽を祀る祭祀の場所はそこにあったはずだが、すぐ南には歴史的建物が重層的に在ったと考えられる。第 4 節と第 7 節で考えたように、500 年ころには都督府の建物が存在しただろう。600 年ころ格の高い太宰府と改称したときには、古い建物は改築された可能性が高い。だから、「改新の詔」が出されたときにはその“太宰府政庁”があったはずである。しかし、長安に倣って条坊に区画された規模の大きな京師を造成するとなれば、元の場所に主要建造物となる宮殿を改めて建築したと考える方がよいだろう。

図 2.3 を見ると条坊の南北線がわずかに傾いているように

見える。この点を井上氏に質問したら、時系列で言うと“政庁跡”の南北正中線が先に傾いていて条坊の南北線はほぼ“政庁跡”の傾きと同じだということだった。そうすると、条坊建設開始とともに改築されたと考えられる主要建造物は、都督府以来の構造線を尊重して建てられたのだろう。その南北線がわずかに傾いていたのだ。建物ぐらいでは目立たない傾きが 2km 余りの条坊になると感知できるようになったということだろう。つけ加えておけば、主要建造物跡の中心と宗像大社の経度が驚くべき精度で同じであることと、宇佐宮が驚くべき精度で油山夫婦岩・大根地山と同じ緯度上にあることに気づいて、太宰府が“聖別された”場所であることを知ったのだった。

倭国の王家の独身女性が齋宮として(卑弥呼のように)、先ほど神事が行なわれたと考えた場所で太陽礼拝の祭事を行なった、とわたしは想像する。そのすぐ南の小字が「大裏」と呼ばれるのは偶然とは考えられない。主要建造物は王の公式の宮殿でその北に隣接する場所には王の住居＝内裏があっただろう。北と南に王の住居と公式の宮殿が並ぶのが中国流王都プランの中心部である。図 2.2 長安城や図 3.3 建康城を見れば、宮殿の南に政府諸機関の建物がある。図 2.3 太宰府条坊復元図で、“太宰府政庁”の南に道をはさんである役所跡は、中国式プランに則って配置されたことを示しているのだ。図 2.2 の長安城を見れば、大扱宮とその南の官庁街とのあいだにも大きい道があったことが確かめられる。

図 2.3 太宰府条坊推定復元図によれば、条坊全体の広さは南北約 2km、東西約 2.1 km である。第 5 節で飛鳥京を百済の泗泚や新羅の金城と比較して王都の広さを考察したが、地図 7.1 を見れば、条坊のまわりまで含めれば太宰府の平地は十分の広がりをもち、王都として飛鳥京はもちろん泗泚や金城よりも立地に優れていることが確認できる。古墳時代から王の宮がそこに置かれた理由はその立地にあるだろう。

念のために言えば、王都太宰府には円丘がないが、その代わりに高天原の神々を代表して日神が沖ノ島にいて、それを拜む天壇に当たる宗像大社が宮殿のはるか真北にある。そう考えると、先ほど考えたように条坊の基点 0 点は日の出を拜む、つまり季節を計る祭礼の場所だったと考えられ、中国の王都プランにある霊台（天文台、古くは物見台）に当たることが分かる。太宰府では霊台や円丘に当たる施設を王宮の北に配置したのだ。祭礼の場所 0 点には小さな祠でもあったのだろうか。

[i . b]

太宰府条坊を特徴づける第二の建造物は観世音寺である。ところが、観世音寺の縁起を記した文献がない。『日本書紀』も記述しない。それを語ってよいはずの斉明紀～持統紀に出てこない。それなのに、「観世音寺は斉明王が 661 年に筑紫で亡くなったとき、同行していた王太子天智が母の追善のために発願してほどなく造営が始められた」、と考えられてい

る。その解釈は、『続日本紀』に書かれた次の二つの短い記事のうち二番目の文に基づいている。

観世音寺は『続日本紀』文武紀第二に初めて登場する。大宝元年(701年)、大宝令が完成した次の日八月四日の条に、「太政官処分。近江国志我山寺封、起庚子年(文武4年)計満卅歳。観世音寺・筑紫尼寺封、起大宝元年計満五歳。並停止之。皆准封施物」とある。近江国志我山寺と観世音寺・筑紫尼寺への経済的な支援に関するものである。大宝令以後寺に公民を割り当てる「寺封」を支給することはなくなったが、太政官が、この三つの寺にだけ例外的に寺封を与えることを決定したのである。天智王につながるの志我山寺に加えて、期限が5年と短いけれども観世音寺・筑紫尼寺を特別扱いはしたのである(文武天皇にとって天智王は母の元明天皇方の祖父)。大宝令が完成した翌日に太政官が例外扱いを決定するほど、観世音寺が重要な寺院だったことが分かる。王朝交代論の立場から見ると、王朝が交代して経済的な基盤が弱くなる観世音寺と筑紫尼寺の支援を表明したことになる。

次に観世音寺が登場するのは、『続日本紀』卷四元明紀の709年の記事である。観世音寺のなんらかの造営を急がせる詔のなかに、「筑紫観世音寺は天智王が斉明王のために誓願して基をおいた所なり」という短い文がある。その詔を解釈して天智王が観世音寺を建てたとされているのだが、歴史の文脈のなかにしっかり位置づけられているわけではない。

『隋書』が607年の倭国の遣隋使には数十人の沙門が含まれていたと書くから、600年代中期の倭国にはすでに相当の数の寺院があったと考えてよい。『日本国はどのようにして成立したか』でわたしは、斉明王が亡くなったとき子の天智は、母の遺体を<大和>へ移す前に筑紫で仮の法要を営んだはずだ、と推定した。そのころまでに<大和>の支配層も仏教を崇拜するようになっていたから、この推定はまずまちがいないだろう。法要を営んだ寺が観世音寺だったから、母の死を思う心情から天智王が観世音寺に報いる願を立てた、というのが常識的に考えて最も妥当な解釈だと思う。元明天皇の詔は観世音寺の何かの建築工事が完了していないと言う。天智王の娘である元明天皇にとって斉明王は祖母で、709年は祖母が亡くなった661年から(0のない数え方で)49年目である(元明天皇の生まれた年も661年という)。その造営は、50回忌を迎えるに当たり父の遺志を実現しようとしたものである可能性が高い。通説よりもこちらの解釈の方が蓋然性が高いだろう。

再確認すれば、列島古代人の宗教的な精神世界に、九州北岸地域で始まった「太陽の道」信仰に外来の仏教を重ねる考えが生まれて、倭国独自の王都プランが生み出されたのである。鎮護国家の寺院観世音寺の造営はその王都プランの一部であった。そして、条坊のある京師を建設せよという詔が出されたのは646年である。ここまでの議論全部を総合して、

観世音寺は条坊建設と同じ時期 640 年代後半に建立されたという仮説が最も合理的だ、とわたしは考える。

尼寺が全国に建てられたのは 750 年代だが、大宝令が出来上がった翌日に観世音寺とともに特別待遇を受けたことは、701 年以前から筑紫には尼寺があり観世音寺と並んで重要なものだったことを教える。これにもう一つ付け加えることのできる事実がある。〈大和〉で戒壇が築かれたのは東大寺の大仏開眼から二年目の 754 年のことだが、鑑真和尚来日を語る文書は、753 年鹿兒島県に上陸して七日目に太宰府で戒律を授けたとしている。〈大和〉には戒壇がなかったのに太宰府にはすでに戒壇があったのだ。戒壇院は、仏教が国家の制度に組みこまれる時期に設置されるべき施設である。その国家的施設が最初につくられたのが太宰府だという事実は、けっして無視できない。隋へ数十人もの留学僧を派遣したあと観世音寺建立のころまでには太宰府にあった、と考えることができる。現在も観世音寺境内にある戒壇院が、以上述べてきた歴史の積み重ねを明示している。

図 2.3 を提出した井上論文は、後世の『観世音寺文書』のなかに「観世音寺の南大門が政庁前面から 7 区画目に位置する」ように書く一文があると指摘し、条坊建設が観世音寺の建立より前か同時期であることを示唆している。井上論文は「条坊施行は現政庁跡への本格的な政庁造営前の 7 世紀末」と見ているのだけれども、「7 世紀末」という判断は現行パラダイムに基づく通説を退けかねているからだろう。これに

関して本稿が提出するのは、王都太宰府で最重要な宮殿と次に重要な観世音寺は、条坊建設と同じ時期 640 年代後半に改築・建立されたという仮説である。

[i. c]

ところが、1968 年からの“太宰府政庁”の発掘調査を踏まえて、現在、“政庁”の建築を次の 3 つの時期に分けてとらえることが行なわれている。

第 1 期：太宰府政庁創建期 7 世紀後半～8 世紀初頭 掘立柱建物

第 2 期：朝堂院形式創建期 8 世紀初頭～10 世紀中葉 礎石建物

第 3 期：朝堂院形式整備期 10 世紀中葉～崩壊まで 礎石建物

考古学的調査の報告は尊重しなければならないが、上の第 1 期や第 2 期の開始時期の推定は現行パラダイムに影響されていると考えられる。前二著や本稿で議論してきたように、現行パラダイムの与える 8 世紀初頭までの政治体制とそれに関連する「太宰府」の認識には異論が成り立つ。出土物によって編年するとはいえ、時間軸は自然科学的な測定や金石文や信頼できる文献に依るのでなければ確実性をもたない。水稲耕作開始年代が 500 年近くもさかのぼることになったのはごく最近のことである。だから、上の年代推定も修正される可能性がある。井上論文の上の判断には、第 2 期の朝堂院形式創建期をせめて 7 世紀末までさかのぼらせることができたという願望が潜む。本稿の仮説は、第 1 期と第 2 期の開始時期をさらにさかのぼらせることを求める。

ここで、先ほど述べた条坊の南北線がわずかに傾いているという問題をもう一度議論する値打ちがあることに気づく。現行パラダイムの見方では太宰府条坊は藤原京よりもあとに建設されたとされているのに、先行するはずの藤原京条坊の朱雀大路は精度よく北から南へ走っている。それは、藤原京王宮からずいぶん離れたところにある文武天皇陵が朱雀大路の延長上にあることが証明している（図 1.2 と図 5.1）。藤原京条坊は精度よく方位を測量して建設されたということだ。すると、〈大和〉の王権によってそのあとに建設されたとされる太宰府条坊が傾いているのはおかしい。もしその順序なら、藤原京の条坊を測量・建設した技師の誰かが太宰府条坊の建設にもたずさわったと考えるのが自然である。それなのに、太宰府条坊の南北線が傾いてしまったことになる。しかし、そういうことはまず起こりえない。

太宰府条坊は、〈大和〉の王権によるのではなくそこで独自に建設されたのである。太宰府の王都プランが藤原京とは異なる独自のものだということはすでに第 6 節で論じた。文武天皇の大宝元年新しい日本国が確立するという情勢のなかで、それに近い時期に倭国が太宰府で出費の大きな条坊建設のような事業を行なったと考えるのは現実的ではない。また、百済に味方することになった 660 年から唐の最後の軍事使節が帰った 672 年までのあいだに条坊建設の事業が行なわれたというのも考えにくい。太宰府の条坊建設は 660 年より

も前だと考えるのが順当である。ところで、第2節や第5節で考えたように、660年に陥落した百済の王都泗泚は、大寺定林寺の位置からして隋大興城か唐長安城のプランを参考にしてすでに整備されていたと考えられる。すると、倭国の王都が百済の泗泚よりも規模が小さかった可能性は低いだらう。だから、太宰府が倭国の王都だとすると、その条坊は660年よりも相当前に建設されていた可能性が高い。そして、『日本書紀』の646年に、条坊で区画された京師を建設せよという詔が出現している。こうして、太宰府条坊は640年代後半に建設されたとする本稿の仮説は、十分な論拠をもつのである。

何度も言及したように、太宰府では東西南北の方角に敏感だったはずだ。それなのに条坊の南北線がわずかでも傾いたとすれば、その原因は先に述べたような経緯しか思い浮かばない。すなわち、歴史の積み重ねを尊重したせいで、以下のように、建造物「太宰府」の重層的な構造線がもっていた南北方向の微小なずれが、条坊の南北方向をわずかに傾かせた。— 礎石の上に建てられた第2期の朝堂院形式の“政庁”とは条坊が建設されたとき建て替えられた宮殿で、それ以前には隋へ使節を送る前に建てられた「太宰府」があったはずで、それが第1期の掘立柱建築である。しかし「太宰府」の前身は「都督府」であり、「太宰府」の下層にはさらに「都督府」の遺構があったと考えることができる —。

ii. 王都大宰府を印づけるその他の建造物

次の二つの議論は小節 i の「政・祭」の施設のところで扱うべきだったが、小節の長さを加減するためここで行なう。

先に“政庁跡”のすぐ東にある月山に漏刻があったという伝承を紹介したが、現在月山の南側ふもとは寺院がある。首里城に漏刻門がありその入り口に漏刻が置かれていたことは、「太陽の道」を見出したときに気づいたことだが、長安城の王の宮殿への入り口建福門の脇に漏刻が置かれたこともすでに第 6 節で述べた。さらに言えば、『日本国はどのようにして成立したか』で、天智王が近江宮に漏刻を設置し鐘鼓をとどろかせたことが、中国の禪讓方式で天子に準じる位に就いたときに許される行為だということを指摘した。だから、漏刻の置かれた場所には鐘または太鼓で時を知らせる建物もあった可能性がある（西安には鼓楼が今も残っている）。漏刻が置かれたのがほんとうに月山だったなら、いま寺のあるところがそうだったのかもしれない。

月山についてはもう一つの可能性がある。第 6 節で、平城京にあとで東大寺が追加されたのは、太宰府の観世音寺をモデルにして行なわれたと指摘した。ところが、平城京には宮殿のすぐ東にタカミムスビ神社がある。大宰府の真東の大根地山にはイザナギ・イザナミ～日神～ウガヤフキアエズまでの主系列の神々が祀られているけれども、天孫ニニギの降臨を差配した母方の祖父に当たるタカミムスビ神が含まれていない。平城京が高天原の神々のうちその重要な造化の神を

あの位置に祀ったとしたら、太宰府のプランにも宮殿のすぐ東の月山にタカミムスビ神を祀ることが含まれていた可能性がある。造化の神は、漏刻によって知られる抽象的な「時」と親和性があるだろう。

ここで、中国の都城プランにあった「太学」に当たる「学校院」のことも再考しておくべきだろう。インターネット上にある「日本遺産太宰府」の説明文が、「学校院」を次のように記述する — 大宰府学校院は「府学校」と呼ばれ、学生・医生・算生 200 人以上が学んでいた。彼らは西海道六国からきた郡司など豪族の子弟たちである — と。この文は、本稿の立場からすれば 701 年の王朝交代以後のことを語るのだが、それ以前に太宰府の「府学校」が一つの政府の「太学」の機能を果たしていた痕跡を明かしている。これに関連して Wikipedia の「大学寮」は、『日本書紀』『天智紀』の 671 年の記事に「学識頭」という語があり、「この時代に大学寮の由来を求める考え方が有力」だとしているが（拡大解釈だと思う）、「学識頭」という役職は本文ではなく人名に添えられた註にすぎない。のちの藤原京に「学校」や「大学」があったか、インターネットで探してもたしかかな手がかりは得られない。「天智紀」の註の「学識頭」は、その時代の倭国にあった役職である可能性がある。

Wikipedia「大学寮」は、大宝令で「具体的な制度が確立したといわれる」としているが、具体的な動きとしては 720 年

代末ごろから「〇〇博士」が設置され、「大学寮」に対する経済支援が実施されるようになったのは 750 年代のことだとしている。しかも、平城京のどこに「大学寮」があったかも知られていない。これらのことは、701 年に大宝令を發布したとき文武天皇の日本国は、まだ、「太学」に当たる機関をお膝元に設置するような状態に達していなかったことを教える。これに対し、太宰府の「学校院」は、条坊図 2.3 に見られるように、“政庁跡”・月山・役所跡の東隣で観世音寺の西隣に位置して相当に広い場所を占め、王都プランでの重要性を主張している。「日本遺産太宰府」の説明文も、太宰府には以前から「学校院」が設置され、定着したその制度が 8 世紀以後も九州で運用された、という理解へ導く。

太宰府条坊図 2.3 は、発掘調査の結果から、都市中央部の朱雀大路に面した四つの坊からなる場所に客館があったと推定している。そこは、唐の長安城で鎮護国家の寺院大興善寺の配置された条坊とほぼ相似な位置である。先ほど考えたように、観世音寺は、宮殿から見て「太陽の道」の方向に配置されたので、空きのできたその区画に客館が置かれた、と解釈することができる。

本稿で考えているように隋と唐の使節が来たのが太宰府だとすれば、『隋書』と『日本書紀』の記述からして王都に相応の宿泊施設があったと推測できる。その客館は都市のなかで便利な場所にあっただろう。ところで、都督府が開設さ

れたところから、北にある宗像大社が指し示す方向へ、つまり「都督府」のちの「太宰府」の建物から南へ走る大路はあったと考えられ、隋・唐の使節は図 2.3 の客館(推定)の場所に宿泊した可能性がある。条坊建設にあたり南北・東西の道をつけるとき、一部の建物が道にかかることがあっても、その建物を移設して残すことのできた建物に加えることが可能である。図 2.3 の客館から宮殿の南正門までの距離は約 1km。隋や唐の使節を先導して騎馬隊が朱雀大路をパレードしたという想像をすることはできないだろうか。

図 2.3 では、朱雀大路をはさんで客館(推定)の西側の同じ大きさの区画も赤枠で囲まれている。それを見てわたしは、その地域が二日市と呼ばれていることをたよりに、そこに「市」があったのではないかと想像したが、そちら側も客館だったと推測されているようだ。しかし、長安城では内郭の南に大街が東西に走っていて、その大街に面して東西の対称な位置に四つの坊を占める大きな「市」が置かれた(図 2.2)。岡田英弘著『中国文明の歴史』が、中国の都城は「市場」を原型としていると説いている。王都太宰府の条坊は長安城のプランを参考にして建設されたと考えられるから、「市」はやはり便利な場所で大きな区画を占めた可能性が高い。今後新しい発見があることを期待しよう。

さて、第 7 節の表 1 には、白村江の戦いの翌年 664 年に、

対馬・壱岐・筑紫国に烽火などの防御施設を置き、筑紫に大きな堤を築いて水を貯めたとある（博多湾の能古島にのろし台があったとされる）。「水城」とはこの濠をもつ防塁のことだが、今は濠がない。図 2.3 を見ると知られるように、この全長約 1.2km の土塁(高さ 9m、基底部の幅 80m、上部の幅 25m)は大宰府の大きなランドマークである。白村江での敗北に衝撃を受けてまもなく、唐軍の侵攻を恐れて水城が建設されたのである。『日本書紀』のこの記述は信じることができる。

しかし、通説のように斉明王と王太子天智が筑紫に来た際「大宰府」が設置された、あるいは、600 年ころに筑紫大宰が設置されたとしても、現行パラダイムが言うように「大宰府」が地方行政機関なら、水城の建設について疑問が生じる。第 5 節で調べたところによれば、本拠地とされる飛鳥宮周辺でさえそれほど大きな都市はなかったと考えられる。太宰府が地方行政機関だったのなら、そこはさらに小さな都市だったと考えざるをえない。それなのにそこを守る水城を築く必要があったのか、藤原京建設に続いて諸建造物の改築・建立工事を含む条坊建設を始めて、大きな財政支出をする必要があったのか。八世紀以後太宰府の担った機能を果たすのにあれほどの規模の条坊は要らなかっただろう。条坊をもつ京師はそこに住む王が権威を示すために必要だったのである。

図 2.3 は、むしろ明らかに、水城が大きくて重要な都市を防衛するために築かれたことを示している。ここまで考えてきたように、太宰府が守るべき王都であり列島で初めての画

期的な広い条坊都市だったから、起こりえる緊急事態に備えて、図 2.3 に示されるような水城を築いたとする方がはるかに道理にかなう（後世元軍に備えて水際に築かれた防塁なら、それを突破されても敵軍が野営できる防塁にはならないが）。

表 1 を見ると、水城が築かれたのは、唐の朝鮮半島占領軍が倭国に使いを派遣しているさなかのことだと分かる。唐軍からの軍使は戦後処理の折衝のために来たはずだが、唐の軍人たちは水城建設を目撃したと考えてよい。そのことは文字どおり折衝に影響を与えただろう。あとでは、唐軍は 500 人や 2000 人も部隊を派遣してきた。それは対抗的な示威行動だったにちがいない。太宰府の王や官僚また住民は、唐軍の圧力に緊張感を強いられたことだろう。さいわい、唐軍に海峡を渡って倭国まで占領する余裕はなく、事態は穏便に収束した。しかしその後の結果を見れば、やはり、白村江での敗戦は倭国の命運に重大な結果をもたらしたのだ。

探求を終えて

『日本国はどのようにして成立したか』で、倭国日本国王朝交代に関し、600年～701年に起きたいくつかの画期的出来事を明らかにしたが、本稿はそれを補充するための探求であった。この探求によって、倭国の王都太宰府の発展から挫折への推移とそれに関連する600年代の列島の歴史とを、具体的に肉付けして理解することができた。王朝交代論は深められたと思う。

あとがき

『古事記』は、奈良盆地に地歩を築いた初代王について長い物語を語ったあと、二代王からは代が変わるごとに「〇〇の命、△△の宮にまして天の下を治められた」という言葉で始める。セイレーンの呼びかけのようにくりかえされるこの呪文は、古代史理解を呪縛するように働く。その誘惑から逃れるには身を論理の柱に縛りつけなければならない。他方の『日本書紀』は、各代の王ごとに系譜から語り始めて、王位が連続と継承されたと説く。それに続く王の事績について、たくさんの箇所創作・編入・改編などがあると言いながら、これまでの歴史家はその複雑な記述から歴史を組み立てようとしてきた。『日本書紀』の記述の錯綜は古代史理解を迷路に誘い込むほどだ、とわたしは思う。

だから、『日本書紀』をジャングルにたとえたのである。気象という複雑系を解析して天気を予想できる高性能コンピュータなら、『日本書紀』の錯綜した記述を読み解いて合理的な解釈を導けるかもしれない。しかしその解析の手法はまだないから、記述された歴史的な出来事を最も合理的に説明できる関連事項の構成を、名探偵ポアロに倣って灰色の脳細胞を働かせて探すしかない。しかし、文献史料だけに頼る方法は実証的に確実な帰結を導く力が弱い。ポアロでも証言以外の関連事項を探してそれも考察に含めるのだから、同じように“物的証拠”をとり入れる必要がある。

たまたまわたしは福岡都市圏の三つの弥生遺跡が驚くほどの精度で一つの東西線に直列することに気づいて、「太陽の道」という概念にたどり着いた。そしてその概念は、古田武彦が中国史書の読

解によって導いた倭国日本国王朝交代論を、文献とは別の視点から支えることが判明した。わたしの二つの著書は、王朝交代を議論するなかで、古代人の精神にあった「太陽の道」崇拝が歴史に関係することを示した。「太陽の道」は『日本書紀』のジャングルに入るときに方位磁石の役目を果たすことができるのである。

本稿は、その人文地理学的方法を敷衍して、外形的な事実として現われる王の都を研究対象とし、太宰府が倭国の王都だったことを論証しようとした。その際、海外の関連する事象も加えて比較の方法を用いた。もちろん、現行パラダイムに王朝交代論を対置する研究は比較の方法を含む。『日本書紀』に記述されている重要事項を最も合理的な関係性のもとに理解するため、これらの方法を用いたのである。それによって、『日本書紀』という文献内で閉じた一つの解釈は、東アジアの歴史との対照も含めた可能な解釈系のどれが最も歴史事象として合理的かという本来あるべき批判の場に戻される。日本列島の王都についてそういう議論をして、一つの結論を得たつもりである。名探偵ほどの推理ができたか心もとないが、提出した太宰府の説明は十分合理的で、600年代の歴史について現行パラダイムに代ることのできる歴史像を伴っている、と思う。

2021年6月25日

2021年7月修正

海蝶 谷川修

